

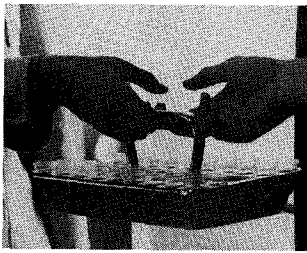
聖徒の道

1983年4月20日発行(毎月1回20日発行)第27巻第4号  
1982年12月18日発行  
郵便物認可

# 聖徒の道

4 1983





## 末日聖徒イエス・キリスト教会

### 大管長会

スベンサー・W・キンボール  
マリオン・G・ロムニー  
ゴードン・B・ヒンクレー

### 十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
ハワード・W・ハンター  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・バックナー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ベリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト  
ニール・A・マックスウェル

### 顧問

M・ラッセル・バラード  
ローレン・C・ダン  
レックス・D・ビネガー  
チャールズ・A・ディディエ  
ジョージ・P・リー  
F・エンツィオ・ブッシェ

### 編集長

M・ラッセル・バラード

### 国際機関誌

編集主幹：  
ラリー・A・ヒラー  
編集副主幹：  
デビッド・ミッチェル  
子供の頁編集：  
ボニー・ソーンダース  
デザイナー：  
ロジャー・ギリング  
制作：  
ノーマン・ブライス

## もくじ

ペテロは外に出て激しく泣いた…ゴードン・B・ヒンクレー……………1	
主のみ名を受ける……………アーデス・G・カップ……………6	
質疑応答……………スーザン・ズモレック ロジャー・A・ヘンドリックス……………14	
神様の愛……………モーリン・デリク・キラー……………17	
セブて見つけたもの……………リチャード・M・ロムニー……………20	
バランスを保つ……………O・ドン・オスラー……………27	
心臓外科医ラッセル・M・ネルソンと従順…レーン・ジョンソン……………31	
主はよみがえりぬ……………バージニア・サージェント……………38	
コマドリはてんごくへいくの……アリス・ストラットン……………40	
おにいちゃんのために……………ナネット・ラーセン……………44	
ローカルページ……………50	

写真説明 ■ 表表紙：(左上より)カラバオと呼ばれるフィリピン産の水牛。フィリピン南部で見られるカヌー。農村で使われる昔ながらの笠をかぶったフィリピンの子供たち。首都マニラ、リザルパークの風船売り。レイテ島レッドビーチでのバプテスマ。裏表紙：(左上より)マニラのサント・トマス大学。旧マニラ、フォート・サンチャゴに美しく咲き乱れる花。リザルパークから臨むマニラ港。マニラ、アヤラ・アベニューのビジネス街。

1983年4月号 聖徒の道 第27巻第4号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-10-30  
電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定 価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)  
半年予約1,100円(送料共)  
1部180円、大会号350円

International Magazine PBMA 0562JA Printed in Tokyo, Japan.

© 1983 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

# ペテロは外に出て 激しく泣いた

第二副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

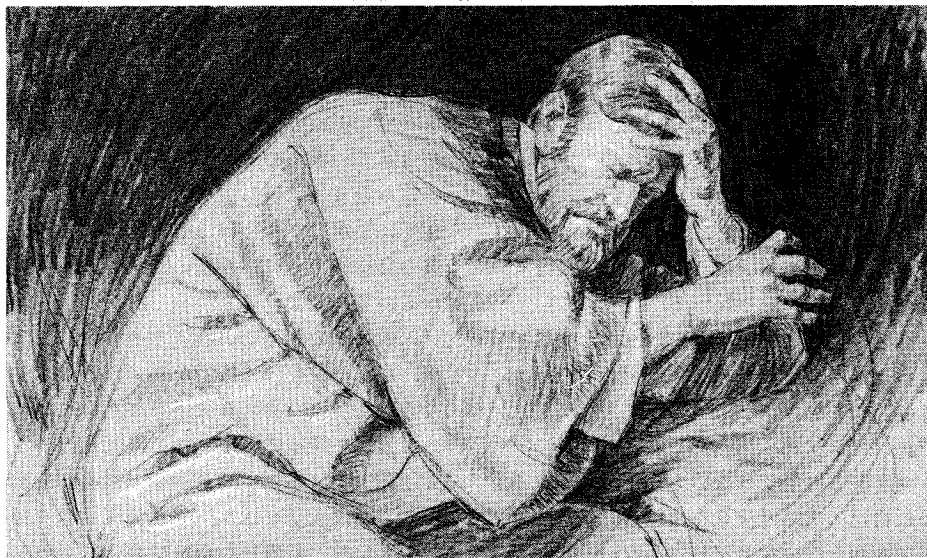
**最**後の晩餐ばんさんの後、イエスと弟子たちはエルサレムを去って、オリブ山へ出かけて行きました。恐ろしい苦難が間近に迫っていることを知っていたイエスは、愛する弟子たちにこのように言われました。「『今夜、あなたがたは皆わたしにつまずく〔見捨てる〕であろう。』……」

するとペテロはイエスに答えて言った、

『たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません』。

イエスは言われた、『よくあなたに言っておく。今夜、鶏トリが鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』。

ペテロは言った、『たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません』。(マ



タイ26：31，33—35)

その後すぐゲツセマネの園での激しい苦悶があり、それからあの裏切りがあったのです。群衆がカヤバのところへ行った時、「ペテロは……大祭司の中庭まで行き、そのなりゆきを見とどけるために、中にはいつて下役どもと一緒にすわって」(マタイ26：58) いました。

形ばかりの裁判が行なわれ、イエスを告訴した人々がイエスの顔につばきをかけ、こぶしで打ったり手のひらでたたいたりしている間に、ひとりの女中がペテロを見て、言いました。「『あなたもあのガリラヤ人イエスと一緒にだ』……」

するとペテロは、みんなの前でそれを打ち消して言った、『あなたが何を言っているのか、わからない』。

そう言って入口の方に出て行くと、ほかの女中が彼を見て、そこにいる人々にむかって、『この人はナザレ人イエスと一緒にだ』と言った。

そこで彼は再びそれを打ち消して、『そんな人は知らない』と誓って言った。

しばらくして、そこに立っていた人々が近寄ってきて、ペテロに言った、『確かにあなたも彼らの仲間だ。言葉づかいであなたがわかる』。

彼は『その人のことは何も知らない』と言って、激しく誓いはじめた。するとすぐ鶏が鳴いた。

ペテロは『鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう』と言われたイエスの言葉を思い出し、外に出て激しく泣いた。(マタイ26：69—75)

何と悲しい話ではないでしょうか。ペテロは自己の忠誠と決意を確言し、決してイエスを知らないなどとは言わないと口にし

たのです。ふと人を恐れる気持ちが起こり、肉体の弱さに負け、さらには告訴されるかもしれないという苦境に立たされて、ペテロの決意はもろくもくずれたのです。その後すぐペテロは自分の間違いと弱さに気づき、「外に出て激しく泣きました」。

私はこの話を読むと、ペテロに同情の気持ちを覚えます。私たちの多くはペテロとほとんど似たようなものだからです。忠誠を誓い、雄々しくあるという決意を確言します。時には、たとえ何が起ころうとも自分は正しいことをし、正しい目的を守り通し、自己にも他の人々にも忠実であるというのを公然と断言さえします。

それから苦難が大きくなり始めます。それは時に社会的圧力であったり、個人的な欲望や誤った野心であったりします。決意がぐらつくこともあれば、修練の手綱を自分で緩めてしまうこともあります。誘惑に負けることもあります。その結果は、良心の咎めと、自責の念と、後悔の苦い涙です。

私たちが毎日のように目にする大きな悲劇のひとつに、高い目標を持ちながらそれを十分に達成できないでいる人々の悲劇があります。彼らの志は気高く、公言している望みも賞賛に値し、その能力も優れています。しかし訓練という点で弱いのです。彼らは怠惰に負け、欲望のために決意が鈍っているのです。

以前、私の知っている人でそのような人がいました。その人は教会員ではありませんでした。彼は有名な大学を卒業し、無限の可能性を持っていました。優れた教育を受け、大いに出世する見込みのある若者として、彼は大望を抱き、夢を実現すべく努力しました。就職した会社においてもとん



とん拍子に昇進し、そのたびに責任は重くなっていきました。そして何年もたたないうちに、会社の首脳陣のひとりとして名を連ねるようになりました。そうした昇進によって、彼は立場上たびたび宴席に顔を出し、アルコールを口にするようになったのです。ほかの多くの人々と同様に、彼もアルコールに打ち勝つことができませんでした。そしてアルコール中毒になり、自制が利かず、とうとう欲望のえじきになってしまいました。彼は助けを求めましたが、力になろうとしてくれた人から与えられた養成法に従って節制することは自尊心が許しませんでした。

彼は流星のように落ち、哀れにも己を燃やし尽くし、夜の闇の中に消えていきました。私は友人たちを次々と聞いて回り、ついに彼が実際に悲劇的な最期を遂げたことを知りました。高い志を持ち、素晴らしい才能にも恵まれてスタートした彼でしたが、さる大都市のどや街で死んでいったのです。昔のペテロのように、彼も自分の内に秘められた可能性を余すところなく発揮できるものと、己の強さと能力に背を向けていました。しかし、彼はその能力を否定してしまっただけです。挫折の影に包みこまれた彼は再びペテロのように、外に出て激しく泣いたに違いありません。

もうひとりの人のことが思い出されます。私のよく知っている人です。彼はずっと昔、私がイギリスで伝道していた時に教会に入りました。彼には喫煙の習慣がありました。教会員になった初めの頃は主に助けを請い、主も彼の祈りに応えて、その習慣を克服する力を与えて下さいました。彼は主に頼り、かつてない喜びをもって生活していました。ところが、思いもかけない事が起こりまし

た。家族や社会から様々な圧力がかけられるようになったのです。彼は目標を下げ、欲望に負けました。タバコの煙のにおいに惑わされたのでした。私は何年かたって彼と会い、彼がかつて味わった古きよき時代について語り合いました。彼もまたペテロのように激しく泣きました。彼はあれこれと非難しました。私は彼がそのように言うのを聞いていて、あのキャシャスの言葉を言いたくなりました。

「ねえ、ブルーナス、僕らがうだつの上がないのはね、なにも運勢が悪いんじゃない、僕ら自身が悪いんだ。」(ジュリアス・シーザー、第1幕、第2場、140—41行。中野好夫訳、シェークスピア全集6、筑摩書房)

気高い目標を持ちながら努力を怠る人、つまり出だしは強いが最後が弱い人について引き続き話したいと思います。このような人々は、自己中心的になり、自分本来の無欲さを忘れて、富を追い求め、人々と才能や信仰を分かち合うことをせず、自分だけのことを考え、活気のない生活を送る傾向があります。彼らについて主はこのように言うておられます。「<sup>しか</sup>而して主の<sup>また</sup>来りたもう日、また<sup>さば</sup>審きの日、また主の怒りの日に汝らは<sup>なげ</sup>歎き悲しみて言わぬ。あゝ、刈り入れは終り夏はすでに過ぎ去りぬ、われは救われず、と。」(教義と聖約56:16)

ところで、ペテロのように主と主のみ業を愛すると公言しながら、後に言葉で、あるいは物言わぬまま主を否定する人々について、もっと具体的に話したいと思います。

強い信仰を持ち、非常に献身的だったひとりの青年のことをよく覚えています。彼は私が苦しい時期に、私の友であり信頼のおける相談相手でした。彼の生き方や熱心

に奉仕する様は、主と教会の業に対する彼の愛を表わしていました。しかし、彼は自分の進歩のために彼を利用する仲間たちのおだてに乗って、しだいに道をそれていきました。仲間を自分の信仰や態度の方向に導くというよりも、反対に彼らの誘惑に徐徐に負けていったのです。

彼はそれまで実践してきた信仰を公然と無視することはしませんでした。しかし、そのような態度を見るまでもなく生活を見れば、彼が信仰を捨てたことがはっきりと分かりました。何年かたって、私は彼と再会しました。彼は迷いから覚めた者のように話しました。声を落とし、目を伏せて、かつて大事にしていた信仰という支えから離れた時の、目的のない生活について話してくれました。そして、話し終わった時には、ペテロのように泣いていました。

最近のことですが、ある友人とお互いの知人について話しました。その知人というのは、仕事では非常に成功しているから見られていました。「ところで、彼は教会で何をしているだろうか」という私の質問に、友人はこのように答えました。「彼は心の中ではこの教会が真実であると分かっているのだが、教会を恐れている。自分が教会員であることを認め、教会の標準に従って生活することになれば、今活躍している社会から締め出されるのではないかと恐れているんだよ。」

私は思いました。「自分の確かな知識を否定したペテロのように、この人もことによると晩年を待つまでもなく、間もなく自分が長子の特権を1杯のあつものと引き換えてしまったことを思い知らされるだろう。(創世25:34参照)そして、自分自身が主を否定しただけでなく、信仰を持たずに成

長した子供たちの前にも主を否定していたことが分かるようになって、深く後悔し、嘆き、涙するだろう。」

主御自身次のように言うておられます。「邪悪で罪深いこの時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう。」(マルコ8:38)

さて、再びイエスを否定して泣いたペテロのことに返りたいと思います。自分の過ちを認め、弱点を悔い改めたペテロは、別人のように変わり、復活された主について大胆に証をするようになりました。そして、先任使徒であったペテロは、生ける神に生き写しの御子、イエス・キリストの使命と死と復活について証することに残りの生涯を捧げました。また、ペテロは五旬節の日に感動的な説教をし、それを聞いた人々は聖霊の力によって強く心を刺されました。また主から授けられた神権の権威によって、ヨハネと共に足のきかない男を癒し、その奇跡のためにふたりは迫害されました。使徒たちがサンヒドリンの前に召喚され罪を問われた時も、ペテロは兄弟たちを大胆に弁護しました。また、福音が異邦人に伝えられるようになるという示現も受けました。(使徒2—4章、10章参照)

かつて網を捨てて人間をとる漁師になるようにと主の証人として召されたペテロは、やがて鎖につながれ、投獄され、最後には、殉教しました。(マタイ4:19参照)ペテロは、復活された主が11人の使徒に与えられた最後の指示、すなわち「すべての国民に教え、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施す」(マタイ28:19)すようにという抗しがたい責任に、最後まで

忠実でした。そして、ヤコブ、ヨハネと共にこの神権時代に地上に戻り、聖なる神権を回復したのもペテロでした。その聖なる神権の権威の下にイエス・キリストの教会はこの末日に組織され、現在も同じ権威の下に活動しています。これらの並はずれた働きのほかにも、ペテロは多くの業を成し遂げましたが、そのペテロもかつては主につまずいて後悔し、その後、悔恨の念を乗り越えて、救い主が昇天された後、そのみ業を推し進め、またこの神権時代における主のみ業の回復に参加したのでした。

ところで今、言葉や行ないによって信仰を否定している人がいるならば、その方々がペテロの例から慰めと決意を得ることができるようにと祈ります。神の王国を築くために自分自身を変え、他の人々の力と信仰に皆さんの力と信仰を加えるという道もあるのです。

最後に、私の知人について話して終わりたいと思います。彼は教会を愛して育ったのですが、実業家としての道を歩むようになり、野心に取りつかれてから、信仰を否定するようになりました。彼の生活には、忠誠心らしきものはほとんど見られないようになりました。しかし、幸いにも深みに陥らないうちに静かな細い声のささやきを聞いたのです。救いへと導く自責の念がわき上がり、彼は変わりました。そして現在は、卓越したシオンのステーキ部長として、また国内はもとより世界的な一流企業のトップ役員として働いています。

教会や教会の教えから離れている兄弟姉妹の皆さん、教会は皆さんを必要としています。そして皆さんにも教会が必要です。皆さんは、理解ある耳を持った人が多くいることに気づくでしょう。皆さんが帰り道

を見つげられるように助けてくれる人は大勢います。皆さんの心を温めてくれる人もいます。そこには苦しみの涙ではなく、喜びの涙があることでしょう。

主がみたまの力によって皆さんの心を動かし、その望みがさらに強められますように。また主が皆さんの決意を強めて下さいますように。皆さんが心の中で真実であると分かっているところに帰る時に、皆さんの喜びが満ちあふれ、心の和みと満足感がありますように。

## ホームティーチャーへの提案

### ◎強調点

ホームティーチングのレッスンで以下の点を示すとよい。

1. 気高い目的を持ち続ける。
2. 義になかった働きによって主への愛を示す。
3. 信仰をもって王国建設のために働く。
4. 私たちは生活を改善できるということを感じる。

### ◎話し合いのために

1. 天父の霊の息子、娘としての可能性に到達することの大切さについて自分の気持ちを述べる。家族にもそれぞれの気持ちを話してもらおう。
2. このメッセージの中に、家族で読んだり話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. 訪問する前に家長と話し合っておくと、この話し合いをより充実したものにできるのではないだろうか。「終わりまで耐えること」について、定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

# 主のみ名 を受ける

アーデス・G・カップ



何年か前の初春に、私は小さい<sup>ひな</sup>の手に引いて、高い木がおい茂る<sup>けいりゅう</sup>溪流の岩場を伝って、幾時間も歩いたことがあります。次はどこへ足を運んだらいいかと、一步一步、転ばないようにバランスを取りながら岩場を進む、それはまるでダンスのようでした。そのダンスに、音をたてて流れる溪流が伴奏を添えてくれていました。

しばらくすると、目の前に草原が開けま

した。切り倒されたばかりの大きな綿の木があちこちに転がっていました。私は姪がその木を踏み越えていけるように、手をつないで高い草木の中を進んで行きました。春を待ちかねたように、土の中から顔をのぞかせている若芽もありました。また山の頂には根雪が見えました。自然界のすべてのものが、神の創造の業を証し、私たちに對する神の限りない愛を示しているように



思えました。

私たちの午後の活動は、夕暮れのそよ風がその日の終わりを告げるまで続きました。

我が家に通じる細い坂道に近づくと、私は姪の手を離して先に行かせようとしましたが、私たちの手はしばらくつながれたままでした。その日、冒険の間中一緒だったふたりの手は、何か目に見えない力で強くつなぎ合わされたようでした。

家のそばの空地に入る手前で、私たちは足を止めました。私はかがんで姪のシェリーを抱き上げ、こまどりが木の枝に作った巣を見せてやりました。

思い出で一杯のこの日の終わりに、シェリーが眠くならないうちに、私たちはひざまずいて祈りを捧げました。シェリーは溪谷やすべりやすい岩、大きな木、こまどりの巣のことを感謝しました。私もそのような祝福に対する感謝の思いを新たにしながら、姪に毛布をかけてやり、おやすみのキスをしました。姪は私の首に手を回して引き寄せ、こうささやきました。「私たち同じ家族だといいのにね。」

「シェリー、私たちは同じ家族よ。」私はとっさにそう説明しました。

「そうじゃないの、本当の家族っていう意味よ。私の名字はラーセンだし、おばさんはカップで、同じじゃないわ。私が言っているのは、もしおばさんが私のお姉さんで、まったく同じ名字だったらっていうこと。」

姪はまだ小さかったのですが、私は何ら

かの形で永遠の真理に目覚めさせることができれば、私たちが永遠にひとつの家族であることを知って安心するだろうと思いました。

「シェリー、私たちは本当にまったく同じ家族なのよ。私たちは、みんな天のお父様の子供なの。そしてみんなでひとつの大きな家族を作っているのよ。私たちにはお兄さんやお姉さん、それに弟や妹がいるわ。イエス様が一番上のお兄さんなのよ。」

「それじゃ、イエス様は何ていう名字なの？」

「シェリー、救い主のことをイエス・キリストって言うでしょう。」姪は無邪気に、それじゃみんなが自分の名前に「キリスト」っていう名字をつけなくちゃねなどと言い出しました。

「それは違うのよ。そのような名前はつけられないの。」

「どうしていけないの？」姪はしつこく聞いてきました。

私は救い主と私たちのつながりが聖なるものであることを知ってもらいたくて、こう説明しました。「きつと、私たちは時々いけないことをしてしまうからではないかしら。その名前をつけるには、まだふさわしくないからよ。」

すると姪は片ひじをついて体を起こしました。「おばさんはどんな悪いことをしているの？ どうしてそれをやめないの？ やめれば私たちはみんなひとつの家族になれる



の？そしてみんなイエス様の名字で呼ばれるようになるのね。」

私は姪のこの単純明快な質問に何と答えていいのか考えてしまいました。この言葉は、まるで初めて聞いたかのように、私の心に入ってきたのです。つい2日前に聖餐会に出席して聞いているはずの言葉なのに、これまで何度となくこの耳で聞いてきましたが、この時ばかりは違った響きを感じられました。まるで全身全霊で聞いたような思いでした。「喜びて御子の御名を受け、御子を常に忘れず、またその下したまえる誠命を守ることを……」（教義と聖約20：77）

聖なるみ名をその身に受け、御子を常に忘れずにその戒めを守ること、これがベッドの中で私たちが話していたことではないでしょうか。

シェリーはこの時の説明でよく理解し、満足したようでした。私は、御子のみ名を受けるといふ誓約を毎週新たにする聖なる儀式について、もっと深く理解したいものだと思ってきました。普通聖餐式は日曜日に行なわれますが、それは平日の行ないにどのようにかわってくるのでしょうか。また、これは子供にとって、青少年あるいは大人にとってどのような意味があるのでしょうか。それは私たちの生活にどのような影響をもたらすのでしょうか。この聖なる儀式を受け身の態度で考え、単なる習慣としてよいのでしょうか。

イエス・キリストは「世のため十字架に

附けられ、世の罪を負い、世を聖くし、あらゆる不義を潔め……あらゆるものを彼によりて救わんため」（教義と聖約76：41—42）に、世に下って来られました。

私たちには自分で自分の罪を贖うことはできません。私たちの罪を贖うために犠牲になり命を捧げられたのはキリストでした。



私たちには自分で自分の罪を贖うことはできません。

私たちの罪を贖うために犠牲になり命を捧げられたのはキリストでした。



キリストが人の理解をはるかに越えた苦しみを受けられたのはゲツセマネの園においてです。私たちの罪の重さがキリストに、あらゆる毛の孔より血を湧かせ、身と霊と筒つながらざる苦しめるほどの痛苦と悲痛を味わわせたのです。みたまの賜によってゲツセマネの園のキリストを思い浮かべるなら、苦しみがながらも自分の罪と闘い、それを克服する力を私たち人間に与えて下さるのは、神の偉大な愛であることが分かります。

私たちにはこのような愛を理解することができないのでしょうか。私たちが自らの



本分を尽くすなら、私たちが罪から贖ってふさわしい者とし、救いと昇栄にあずかる者とする、これが主の贖いの業です。

それでは、私たちの本分とは何でしょう。自らの罪を悔い改めてバプテスマを受け、聖霊を受けてすべての戒めに従い、キリストの贖いを受け入れることです。

「われらは、キリストの贖罪により、すべての人類は、福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず。」(信仰箇条第3条)

バプテスマを受けて主の教会の会員となった時に、私たちは救い主のみ名を受けるといふ誓約を主と交わしました。私たちはバプテスマの時の誓約を毎日覚え、人生におけるこの大切な出来事を念頭におきながら、心からしたいと思っていることを行なっているのでしょうか。

私もシェリーも、そして教会に集うすべての人が、救い主の贖いを思い起こさせてくれる聖なる神権の儀式である聖餐を受けています。聖餐を受けることで私たちは日昇栄に向かって進歩することの大切さを心に留めることができます。これは尊い聖なる記念の儀式です。日曜日に限らず、月曜日も火曜日も水曜日も、1年を通じて、そして人生の山にある時も谷にある時も、私たちに主の贖いを思い出させてくれるのです。救い主が私たちを心から愛して下さっていることは、シェリーにとっても、私たちにとっても疑う余地のない事実です。

神の御子についてはアルマ7：11—12にこう記されています。

「この男の子は世の中へ出て苦難とあらゆる誘惑である試みとを受けたもう。……この方が自分でその民の苦しみと病いとを引き受ける……

……また肉体をもつ者として慈悲の心に富みたまひ、虚弱の度に応じてその民を救う方法を知るために民と同じく虚弱を受けたもう。」

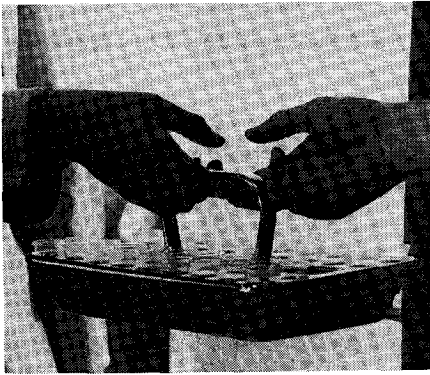
マリオン・G・ロムニー副管長の話を聞いて、聖餐を受けるということに対する私の考え方は変わりました。ロムニー副管長はこう述べています。

「さて、聖餐にあずかる時だが、ただ受けるだけの消極的な気持ちで臨むようであってはならない。単なる歴史的な事実としてしかイエスの死を捉えられないならば、イエスの苦難や死を思い起こすことはできないだろう。聖餐の儀式は極めて重要であり、霊的な体験を味わうものでなければならない。このことについて、救い主はこう言われた。『……さらば、汝らはこの儀式によりてたえずわれを記念すると言ふ証明を御父になすを得ん。』(Ⅲニーファイ18：4—9参照)

何かを証明するためには、心を働かせ、証明しようとするものに心を集中させなければならない。私たちは聖餐を受ける時に贖い主のことを記念し、御子を常に忘れないことを証明するだけでなく、喜んで御子の

## 主のみ名を受ける

み名を受け、その戒めを守ることを御父に証明することも忘れてはならない。今日世の中には、聖餐のパンと水が、イエスの肉と血になると教える教義があるが、私たちにはこのような教えはない。なぜなら、聖餐の儀式によってもたらされるいかなる変化も、聖餐の意義をよく理解して受ける



人の心の中で起こるものだと知っているからである。そのような人こそ、最も驚くべき方法で心に感動を覚えるのである。それは、彼らに主のみたまが与えられるからである。」(In Conference Report 「大会報告」1946年4月, p. 47)

兄弟姉妹の皆さん、自分はふさわしくない、主の聖なるみ名を受ける資格がない、あまりに不完全過ぎるなどと感じたり、また肉体が弱かったり、あるいは将来の自分の姿を考えて霊が沈んでいるような時、私たちは消極的な気持ちになり、自分がふさわしくなるまで救い主との聖なる交わりは

控えたほうがよいのではと考えたりするものです。しかし、自分がふさわしくないのではと思う時でも、また自分が変わっていても、主の贖いの偉大な賜は、私たちの前に再び差し出されるのです。消極的な気持ちになった時のあなたは、主に心を向けているでしょうか。主のみこころに逆らわずに従おうとしているでしょうか。

ふさわしくなろうと努力し励む時に、私たちの霊は真の謙遜さと感謝する心を持つようになります。そして、それだけ強く望んでいるのですから、その賜を受けるためのよりよい備えもできているはずです。実際、永遠の報いを受けようというのであれば、そうしなければならないのです。

聖餐の誓約はいつもその効力を有しています。この賜は、本来の目的のために使えるよう私たちが備えをする時に、一層貴いものとなります。今私はシェリーに向かってこう言いたいと思います。「そうね、私の名前に救い主の名前を付け加えましょう」と。私たちにそれができると主は言っておられます。またそうするよう主は望んでおられます。主は私たちが快く主のみ名を受けることを願っておられるのです。

私たちが心から求める時に、この聖なる賜が私たちの心にしみわたり、私たちはそれを本来の目的のために使うことができます。

私たちは義に飢え渴いた心で聖餐式に臨まなければなりません。聖餐式は自己評価



の場であり、進むべき道の修正をする時であり、必要とあらば生活を改める決心をする時でもあります。また、自らを省みて、神が賜った聖なる贖いの意味をかみしめ、何をなすにも神のみたまの導きが得られることの素晴らしさをさらによく理解する場なのです。

徐々に霊的に高い段階に進んでいくにつれ、私たちは前世で同意したこと、すなわち神の計画の下、すべての人に救いと永遠の生命をもたらすために協力するという約束を実行するようになります。

みたまが常に自分と共にいるようになると、私たちの生活は大きく変わってきて、言葉遣いや日課にも、また車を運転している時や買い物をしている時にもみたまの導き得られるようになります。やがて、私たちの行ないから利己的などころがなくなり、人々とも思いやりと理解の心をもって接することができるようになります。また奉仕したいという気持ちが強まり、いつしか善をなしている自分に気づくようになるでしょう。そして、私たちは神のみ名だけでなく神のみ姿をも自分の身に受けられるようになるのです。(アルマ5:14参照)

このようなことは、昔から行なわれてきたことです。キリストの時代にもありました。キリストとごく親しく交わることができたのはわずかな人でしたが、最初の弟子たちは次第に思いやりの心と理解を深め、霊的に成長して大きな力と影響力を持つよ

うになりました。

パウロの場合は、もっと劇的な過程を踏んでいます。ダマスコへ向かう途中で、パウロは救い主に会いました。そしてその時から、彼の言動、歩み、生涯は大きく変わったのです。

私たちはこのような出会いを、それほど劇的でないにしても、自分自身の人生において経験しているでしょうか。こうした出会いの時に、私たちはそこに奇跡を見ることが出来ます。奇跡をもっとよく理解し、それを体験することもできます。救い主が私たちをご覧になる時のような目で私たちが互いを見るようになれば、生活は変わっていくでしょう。主が私たちに教えられたように、互いに教え合いたいと思うようになるでしょう。また、主が証されたことを互いに証し合えるように霊性を高めたいと思うでしょう。そして私たちが集った時には、こういう言葉が聞かれるようになるでしょう。「私たちは言葉のやり取りをするのではなく、心と心を通わせ合うのだ。」このような関係は友人や愛する人々だけに限らず、その人の永遠の幸福に関して私たちが何がしかの責任を負うすべての人々との間にも広がっていくようになるでしょう。そして、みたまによって、世の人の見方ではなく神が御覧になるような見方で物事を見ることができるようになるのです。

ロムニー副管長は、教会の責任から解かれた姉妹たちに向かってこう述べています。

「皆さんに主の助けがあって、毎日を主のみたまと共に送ることができるように祈ってやまない。主のみ声を聴いてそれに応えられるよう、生活を整え、知恵を求めることは、素晴らしいことである。そうする時に、生活に慰めがもたらされる。……みたまの声をよく聴き、みたまが何を伝えようとしているのか識別する力を得るように。そして、その勧めに勇気を持って従いなさい。」

ここで、隣の家にいる兄弟姉妹や、近くにいる人、道を隔てた所にいる人、ずっと遠くにいる人のことを考えて下さい。救い主がその人の中に見るものを、あなたも見いだそうとしていますか。その人の重荷を軽くし、心を明るくし、理解力を深め、あるいはまた希望を抱かせるようなものを、救い主ならこうされるというような方法で分かち合おうと思いませんか。このようなことができますか。しようと思っていますか。

聖餐を受けて誓約を新たにすることが毎週与えられています。私たちはこれを通して心の中に、力が増し加えられ、望みや人のために何かしようという決意が強くなっていくのを感じることができるでしょうか。あなたは真理とは何かを真剣に考え、人に教えられる事柄について自分なりの証を持ち、救い主の導きを得てそれを見知らぬ人であろうと兄弟姉妹であろうと自分の隣人に教えようと思っているのでしょうか。

これを真剣に行なおうとする時、ほのほのとした温かい思いが心を満たすことでし

よう。声は和らぎ、心は和み、思いやりの心が育まれ、ちょうど主のみ名によって仕えている時のようなみたまを感じることでしょう。これこそ霊的な経験であり、私たちが切望するものです。主を忘れず、主のみたまを内にとどめようとする時に、私たちはこのことを経験することができるのです。



みたまが常に  
自分と共にいるようになると、  
私たちの生活は  
大きく変わってきて、  
……いつしか善をなしている  
自分に気づくように  
なるでしょう。



私たちは人々に手を差し伸べてこそ、主のみ名を受けるにふさわしい者となります。そしてそれは、私たちの日常の生活や日々の家事の中で、また親しい人々との交わりの中で実現されるのです。

私たちは教会にいる時も、バスに乗っている時も、買い物をしている時も、教室にいる時も、そして家にいる時は特に、主と同じ立場に立って互いを見るように努力し





ようではありませんか。相手の限りのない可能性を認め、機会をとらえて永遠の真理を分かち合うようにしたいものです。その真理は、やがてみたまのささやきによって個人的な証となっていくでしょう。救い主はその生涯の終わりに当たって、私たちのために苦しみを受けながら、主の弟子となるにはどうしたらよいかを教えられました。

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。

互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。」(ヨハネ13:34—35)

主のみ名を受けると、私たちの行ないの一つ一つが主に対する決意の現われとなります。また、完成を目指して努力したにもかかわらず、思うようにいかなかったとしても、安息日と聖餐の儀式の時が近づくにつれ、かつてなかったほどに深い感謝の念を持って、真剣かつ熱心に自分を見つめるようになるでしょう。そして聖餐を受けることによって心の変化を感じ、傷ついた靈を癒して、再び主に従って行こうという決意をすることができるのです。

新たな1日、新たな1週間、新たな機会に臨む度に、私たちはもっと深く感じ取り、もっと真剣に心を配り、もっと愛をもって

理解し、もっと目的をもって教え、いつも主を忘れずに主のみたまが共にあるよう積極的に求めるようになるでしょう。

何年か前のあの夜、シェリーの小さな手をきゅっと握った後でそっと部屋を出る時、私は心に感謝の念と敬虔な思いが込み上げてくるのを感じました。手をつないで午後の間ずっと一緒に溪谷を歩き、木を踏み越え、抱き上げてこまどりの巣の中にある開きかけた生命の奇跡を見せてあげたその子のお陰で、私は偉大なる永遠の真理をさらに深く探求し、理解しようという気持ちになりました。ベンジャミン王はこう説明しています。

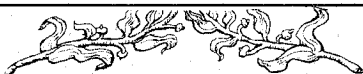
「お前たちの結んだ誓約のためにお前たちはキリストの子と呼ばれ、キリストの息子や娘と呼ばれる。それは今日キリストがお前たちの精神を新に生みたもうたからである。お前たちはキリストの御名を信ずるから自分の心が改まったと言う。従って、お前たちはキリストにより生れてその息子や娘となった。」(モーサヤ5:7)

私たちは皆ひとつの家族の一員であることを忘れないようにしましょう。道に外れたことをしている時には、シェリーが私に「どうしてそれをやめないの？」と尋ねたことをもう一度よく考えて下さい。心を改めるということはいつも簡単にできるものではないかもしれませんが、でも、主の助けがあれば必ずできるのです。



# 神様の愛

モーリン・デリク・キラー



➤ こ数年間、神様の愛を伝える聖典は私にとって特別な意味を持っていました。なぜなら、そこには美しい言葉で真実が表現されており、折にふれ、私の考えや気持ちに様々な影響を与えてくれたからです。しかし何よりも大切なことは、聖典が私の生活の中の霊的な出来事にかかわりを持っていることが分かり、そのために聖典に心を引かれていたことでした。

忙しい休暇シーズン中のある晩のこと、こんな経験をしました。私は次の日曜日にする聖餐会のお話のために、大あわてでお話の主旨を強く訴える聖句を探していました。親戚が家に訪ねてくること、休暇の準備がまだ整っていないこと、家の中が散らかっていることなどを考えると頭が混乱してきて、こんなに忙しい時に、どうして監督に「お

引き受けします」などと言ってしまったのかと後悔しました。私はしばらくの間いたずらにページをめくっていましたが、ついにニーファイ第一書の第11章を見つけました。そこには、救い主の降誕と地球での伝道についてニーファイが受けた素晴らしい示現が詳しく書かれていました。どうい

うわけか、以前にこの啓示を読んだ時には特に何も感じなかったのに、その晩に限ってこの聖句が強く私の胸を打ちました。ニーファイは喜びに満ち、こう記しています。

「天使が私に『神の子羊、まことに永遠の父なる神の御子を見よ、汝は父の見た木の意味を知っているか』と仰せになるから、

私はさよう、その木は神の愛であって人の心をあまねくうるおすものであるから、どんなものよりも好いものであると答



©Providence Lithograph Company

えると、

天使は『そうであるそれは心にとって最も喜ばしいものである』、と言った。(I ニーファイ11：21—23)

その言葉はまるで生まれて初めて発見した宝物のようでした。リーハイの見た白い実のなる木の意味が初めてはっきりと分かったのです。この上なく甘い木の実、神様が持ちたもう、人を感化せずにはおかない優しい愛を表わしていました。

こうして私はお話のテーマを見つけただけでなく、それから数日間の忙しい生活を乗り切る力も得ることができたのです。お客が詰め掛けてきて店は忙しく、レジは鳴りっぱなしでしたが、そんなことは気にもなりません。私の心は神様の愛で再び温かくなり、強くなっていました。

しかし、この「真夜中の探求」がもたらした最大の成果は、過去の大げんか思い出のひとつが心の中によみがえってきたということです。神の愛を自分の手で見いだした時の思い出です。

その頃、私は20代後半で独身でしたが、それまでの人生を振り返ってみて何か大きな変化を求めていました。そしていやな誕生日が来ると、ずいぶん年を取ってしまったという気持ちになり、独身の教会員の大半がそうであるように、私はある大切な目標を逸してしまっていると感じていました。私は主からはっきりとした導きを受けたいと思い、生まれて初めて神権指導者に祝福をしてもらえるよう頼みました。彼は、断食をして準備しますからあなたも断食して下さいと言いました。そのようにして、まばゆいようなある日曜日の早朝に私たちは会いました。

彼が祝福の言葉を述べている間、私は問題の答えと解決法を見いだそうとして、じっと耳を澄ませていました。しかしその祝福を聞いて私は肩を落としました。賢明に

も、主は私をつき離し、自分で道を見いだすようにと言われたのです。しかし主は、その代わりに私が本当に必要だったもの、つまり神様は私を愛して下さっているという疑いのようなない証を与えて下さいました。その祝福の言葉を聞いて、私は神様が私の生活や様々な問題をはっきりと御存じだったことが分かりました。神様が私にいつも力を与えて下さったことが具体的に心によみがえってくるたびに、みたまはその一つ一つが真実であることを教えてくれました。そして私の体のどこか奥深い所から愛と感謝がわき上がってきて、心に満ちあふれました。私は生まれて初めて神様の愛を実感し、真心から、私自身の愛でそれに応えたのでした。

私はこの経験から得たものについて、しばしば考えました。神様の愛を知ることがどうしてこうも私の人生に不変の力を与えてくれるのでしょうか。不思議なことに、神様はとても近くにいらっしゃって、人と言えない悲しみや恐れや、真夜中にふとわき起こる困惑さえも何から何までみんな知っていらっしゃいました。私は独りぼっちではなかったのです。神様の愛は私の悩みを取り除いてくれました。また、私が期待通りに自分の目標を達成できなかったとしても、どのようなものであれ神様の計画は、私の計画よりも優れたものであることを教えてくれました。

私が監督から聖餐会でお話をするように頼まれたのは、こんなことがあって間もなくのことでした。私は喜んでそれを引き受け、集会の前日までかかって筋が通っていて知的で、的を得た聖句と知識で入念に裏付けたお話を準備しました。

土曜日の夜になって監督から電話がありました。彼はどんな些細なことでもみたまの導きを受けているような人でした。

「あなたが明日お話をなさる時、準備したお話はしないで下さい。心が語ることをそのまま話して欲しいのです。」

「でも私は本当に素晴らしいお話ができるように随分時間をかけたのですが。」

しかし彼は頑として言い張りました。「私はあなたの心からわき出るお話をしていたきたいのです。」

私は綿密に準備したお話をやめるのは気が進みませんでした。しかしみたまのささやきに耳を傾けてみると、はっきりした考えが頭に浮かんできました。「神さまの愛についてこの間得た証をするべきだわ。」しかしあのような個人的で神聖な経験を多くの人々の前で話すのは容易なことではありません。

私は教師としてかなりの経験を持っていましたが、その日曜日は胸の鼓動を抑えながら説教壇へと歩いて行きました。私は神様の愛を見いだしたことを話し始めました。そして神様の愛を感じる時、いつも味わう温かい気持ちや信頼について話す時、神様の守りと慰めを表わした聖句の箇所を開きました。

「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人々を石で打ち殺す者よ。ちょうどもんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。」(ルカ13:34) 私にとってこの聖句は他のどんな描写よりも美しく感じられ、聡明で優しい神様の愛を教えてくれるものでした。

私は、神様の愛が近づきたいものではないことを如実に物語っている素晴らしい聖句をもうひとつ選びました。

「われに近づけ、さらばわれ汝らに近づかん。熱心にわれを求めよ。さらば、汝らわれを見出さん。求めよ、さらば与えられ、

叩けよ、さらば開かるることを得ん。」(教義と聖約88:63)

このお話をするのは、大変でした。しかし、今まで私は何回もお話をしてきましたが、そのお話は、それまでのどのお話よりもはるかに強く私自身や他の人々の胸を打ちました。私は、そのお話で引用した聖句が美しいとか意味深いとか思ったことは一度もありませんでした。また、私はこの時ほど説教壇の上から真実を語っているのだという強い確信を持ったこともありませんでした。

つい最近のことですが、私はモルモン経の中に神様の愛が力強く詩的に表わされている箇所をまた見つけることができ、うれしい経験をしました。

「心の清いすべての人たちよ、頭をあげて神の楽しい言葉を受けよ。そしてあくまで神の愛を味わえ。あなたたちの心が堅固であるならば、とこしえにこのようにすることもできる。」(ヤコブ3:2) 私は「あくまで味わう」という含蓄のある言葉にたちまちのうちに引き付けられてしまいました。ヤコブはこの短い言葉で神様の愛が比類なく深いことを伝えようとしているのです。

私はこのヤコブ書の聖句を20年も前から読んでいました。でも、その日はいつも増して、はるかに意義深い経験をすることができました。この20年の間に、経験と啓示により私は神様の愛がどのようなものかをたくさん学んだのです。私は神様の愛は豊かで尽きることはないものであることを知りました。その愛は、飢え渴いた人が探し求めるのでなければ見つけることのできないものです。しかし、心が福音にしっかりと根をおろしていさえすれば、私たちはその神様の愛を、いつまでも「あくまで味わう」ことができるのです。

# セブで見つ けたもの

リチャード・M・ロムニー



ベンジャミン・ミサルーチャ  
アベリナ・ミサルーチャ

ミサルーチャー家は、中部フィリピンのこの島に移ってきてから、今までの生活に無かったものを見つけることができました。

★ ★ ★

**通**りでは、車のクラクションが鳴り響き、タクシーやバスがひしめき合っていました。ベンジャミン・ミサルーチャーは市場に腰をおろし、車が行き来するのを見ながらハンカチを取り出して額の汗をぬぐいました。彼はそこで妻が早く買い物を終わってくれるのを待っていました。フィリピン特有のあの湿度の高い暑さの中で、彼は早く家に帰って子供たちとゆっくりしたいと思っていました。

その時、彼の目はふと、その広場を見下ろす建物の壁に取り付けられた看板の上にとまりました。「いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない」看板にはそう書いてありました。彼は知らず知らずのうちにその言葉について深く考え、確かにその通りだと思いました。

「当時、私はまだ若く30歳位で、4人の子供がいました。私たちはどちらかと言えば、他のフィリピン人に比べ恵まれた生活をしていましたが、それでも自分の生活に満足していたわけではありません。私は心の中で何かもっと他のものを捜し求めているのです。」そう彼は語っています。

看板に書かれていたのはデビッド・O・マッケイ大管長の言葉でしたが、それを書いたのがまさか、首都のマニラに住んでいた時に3週間ほど話し合ったことのある同



じモルモン教会の宣教師だとは考えてもいませんでした。彼はまた南部のもうひとつの大きな町ダバオでも、二度ほど長老たちの訪問を受けたことがありました。

ベンジャミン・ミサルーチャは製薬会社に務めていましたが、それからまたしばらくして、中部諸島のひとつにある重要な町セブ市に転動してきたのです。ミサルーチャ氏と彼の家族が自分たちの生活の中に無かったものを見いだすことになったのは、このセブ市でのことでした。

ミサルーチャ一家は新しい家に胸を踊らせていました。セブとその周辺はフィリピンの歴史を語る上で非常に重要な所です。世界一周を試みたフェルディナンド・マゼランがフィリピンに初めてキリスト教を紹介したのがここでした。マゼランの木製の十字架と言われるものが、今なお町の広場に立っています。1565年から1571年にかけて、セブはスペインの植民地の首都で、セブの住民はのちにスペインからの独立戦争で重要な役割を果たしたのです。第二次世界大戦の時には、ゲリラ行為に対する報復として、セブ市はほとんど全市にわたって破壊されてしまいました。しかし港だけは無傷のまま残り、その後町は再建されました。今日、セブは島と島を結ぶ商業や国内航空便の中心地で、農業に携わる人、工場の労働者、ビジネスマンなど様々な人々が生活しています。ミサルーチャ家の人々は、フィリピンならどこへ行っても同じように、セブの人々もとても親しみやすく、親切なことを知りました。

「フィリピン人はもともと親しみやすい人々なんです」とベンジャミンの奥さんの

アベリナが語っています。「家族の絆もしっかりしていますし、他の人々とも親しくしています。共にいろいろな経験をしたり、物質的なものさえも分かち合っています。」

分かち合いの精神がそれほどまでに浸透している社会にあって、特に寛大で親切な人として目立つのは非常にめずらしいことです。地元のPTA会長がまさしくその良い例でした。ミサルーチャ家の人々が引越してきた時から、彼女は彼らがその新しい町に慣れることができるように随分と骨折ってくれました。やがて、ミサルーチャ氏はPTAの役員として奉仕することになりましたが、後になって彼はそのPTA会長がモルモンの監督の妻であることを知りました。そして彼の教会に対する好奇心はますます深まっていきました。

「ある日、私は家に向かって歩いていくおふたりを見かけ、走り寄って行きました」とミサルーチャ氏は言っています。「私は彼の行っている教会をもっと詳しく知りたいと話しました。すると彼はふたりの素晴らしい若者を紹介するから、その人たちから聞くようにと言いました。」

その後の10カ月間、長老たちはミサルーチャ家を足繁<sup>あししば</sup>く訪問しました。ベンジャミン・ミサルーチャは、前に別の宣教師たちと会った時のことを話して、新たに紹介された長老たちをよく笑わせました。それはその宣教師たちについてまだあまり知らなかった時のことです。「彼らは我が家のドアをノックし、私にこの家の主人かどうかと尋ねてきました。家の雑用をしていた私は暑さのため汗だくになっていたので、『いいえ、私はここの掃除夫です』と答えました。

それは私がいつも家族にふざけて言う言葉でしたが、彼らはそれを真に受けたのです。」

アペリナはいつも彼らのために冷たい水やジュース、ケーキそして時にはシオパオ（ソーセージや玉子の入った半焼けの白い中華風蒸しパン）を用意しました。当時、子供は5人いましたが、福音についてまじめな話をする前は、よく宣教師をからかったり、冗談を言ったりして楽しんでいました。

「私はまだモルモン経が信じられなかったので、聖書から答えを得たいと思いました。彼らは聖書の中から私に答えを示してくれました。自分自身でさえ答えられない疑問に、どうして彼らが適切な答えを与えてくれるのか私はすっかり当惑してしまいました。」ベンジャミンはそう語っています。少しずつですが、彼の当惑は理解へと変わっていきました。宣教師たちが、適切な答えを見いだすことができたのは、真理を知っていたからなのです。彼は家族を集め、話し合いを持ちました。

「このことについて、自分でよく祈ってみて欲しい。」彼は妻と子供たちにそう言いました。次の家族会議で、家族全員が末日聖徒になりたいという気持ちを表わし、1978年4月29日の土曜日にバプテスマを受けました。

「私たちは会員になってからずっと祝福を受けて来ました。」ミサルチャー兄弟はそう語っています。彼は保険会社で働き始め、仕事は順調に伸び続けてきました。「友人たちの中には私に敵意を抱く人もいたことは事実です。彼らは私に2年以内に以前行っていた教会に戻るよう忠告しました。で

「私は彼の行っている教会をもっと詳しく知りたくと話しました。

すると彼はふたりの素晴らしい若者を紹介するから、その人たちから聞くようにと言いました。」

も私は真の教会、キリストの教会を見いだしたのです。家族の絆は一層強まりました。子供たちはよりしっかりと各自の技術を伸ばすようになり、人々の前で恥ずかしがらずに話せるようにもなりました。私には自分が主の道を歩んでいることが分かりました。」

現在、ミサルチャー家はセブ市郊外のラグにあるLDSステーク部センターからさほど遠くない明るい白塗りのアパートに住んでいます。彼らはセブ市フィリピンステーク部の、セブ市第一ワード部の会員です。現在45歳のミサルチャー兄弟は、長老定員会の会長とステーク部の音楽委員長の責任を持っています。彼の奥さんは日曜学校の教師とステーク部扶助協会の音楽指導者です。また21歳になる長女のベネットはステーク部活動委員会の委員長および扶助協会の社会の教師を務めています。

19歳になる長男のベンソンは、ステーク部若い男性の役員であり、伝道に出る準備をしています。16歳の娘のベレングは、ワード部初等協会の書記をしています。15歳のベルミンは、教師定員会の第一副会長で、その下の妹で12歳のベンジェリンは、「私た



ミサルーチャ家族

ちがみなお互いに仲良くやっているかどうかをチェックする責任」を受けています。

物事に関して最終的な決断を下すのはミサルーチャ兄弟ですが、家族はそれぞれ自分の意見を述べ合います。「私たちは子供たちに自由に意見を言わせるようにしているんです」とミサルーチャ姉妹は話しています。「何か問題があると、私たちはそれを家庭の夕べで話し合います。もちろん家庭の夕べでは楽しいこともやります。」

その楽しいことの中には音楽も入るとベンジェリンは話しています。「家にはソプラノ、アルト、テナー、バスの各パートがあるので、歌う時には必ず4部合唱で歌います。それにうちの者のほとんどはギターかピアノあるいはその両方を弾くことができます。」家庭の夕べでは霊的なレッスン

もしますし、ベルミンが主演を演じる、マニラ神殿建設資金獲得のためのステーキ部主催の演劇の練習をしたり、健全な映画が上映されていれば町へ出かけて映画鑑賞もします。また特別な場合には、家族で外食をすることもあります。「ぼくたちはお米やいか、トロピカルフルーツみたいなフィリピンでとれる食べ物が好きです。もちろんピザも大好きです」とベルミンが言っています。

ミサルーチャ家には、チームワークの精神が行き渡っています。「私たちは各自がそれぞれ家で仕事を分担して受け持っています」とベレンダは話しています。「だからといって他の人の宿題を見てあげなかったりということでは、ありません。」ホームティーチングの同僚として父親と一緒に行動し

ているベンソンはこう話しています。「ぼくはお父さんの前にいても窮屈に感じたりはしません。友だちと一緒にの時でもそうです。ぼくにはお父さんも友だちなんです。ベネットもそうです。学校で何かいやなことがあっても、そのことをベネットに聞いてもらえるし、よく分かってくれるんです。」

戦争でほとんどの国の記録が失われてしまっているにもかかわらず、ミサルーチャ家ではほとんど4代にわたって系図を調べ終え、さらに詳しい資料を入手するための努力を続けています。ベネットはよく墓地に出向いて、墓石に刻まれた名前や日付を調べました。ベンジェリンもベンソンもそれぞれの覚えの書を誇りにしています。ベレンダは、いつもきちんとして日記をつけています。日記には、自分たちの地域に近々新しいステーキ部ができること、マニラに、もうじき神殿が建つこと、両親が地域大会に行き行ってスパンサー・W・キンボール大管長の話聞いたことなどが記されています。

「私は自分の気持ちや考え、決心や経験、自分のしたことなども記すようにしています……」

「それに、特に大好きな男の子のこともね！」妹がにこりとしながら付け加え、みんなを笑わせます。

地元のテレビ局のレポーターとして活躍しているベネットは、自分が仕事の重圧に耐えられるように、家族がよく助けてくれると話しています。

「私の仕事はカメラマンと一緒に、その地域の重要な、また意義深い事柄取材することです。」彼女はこれまでも市長をはじめ地元の他の役人たちにインタビューしてき

ました。「時には火事や強盗事件などを取材することもあります。自分自身の現在の状態を幸せだと思っていない人々がとてもたくさんいるのです。」

「家に帰った時に、我が家にあるような素晴らしい雰囲気待ち受けていてくれるなら、主に心から感謝したくなるものです。たとえ問題や困難にあっても、私に家へ帰って来てそのことを話せるように、神は私に家族を与えて下さっています。両親や弟、妹たちは私が問題を解決できるように助けてくれます。日曜日に教会に行ったり、週日の教会活動に出席したりと多くのことを家族と一緒にしながら、私はたくさんの手助けを受けています。」

彼女は仕事の時に、インタビューの相手の人からコーヒーを出された場合、それを断りますが、そうすると、相手はその理由を聞きたがり、彼女がこの教会の会員であることに関していろいろと質問をしてくるそうです。「そんなことからよく知恵の言葉の話になるんです」と彼女は話しています。彼女はまた次のようなことにも触れています。「放送の仕事をする時に、『どぎつい言葉』に嫌な思いをすることがよくあります。ひどい言葉でどなりつけるディレクターもいます。レポーターの仕事以外に、私はショーなどのディレクターの仕事を引き受けることもあります。そんな時『どうして他のディレクターのように怒ったり、わめき散らしたりしないのですか』と言われることがよくあります。でも、悪い言葉を使わなくとも注意を与えることはできません。もっと良い方法で効果を上げることができると思うんです。」

「たとえ問題や困難があっても、  
私が家に帰って来て  
そのことを話せるように、  
神は私に家族を与えて  
下さっています。」

ミサルチャー家は、教会での活躍ぶりのほかに、学校に通う子供たちのことでも有名です。子供たちはみな小学校から高校まで立派な生徒として努力してきています。ベネットは、高校で次席の卒業生として式辞を述べました。ベンソンは現在、クラスで2番目の優等生です。現在高校のクラスで2番目のベレングは小学校卒業の時もやはり次席でした。

「我が家ではまだこのジンクスが破れないんですよ」とミサルチャー兄弟は笑みを見せながら語ります。「でもまだ卒業生総代（首席卒業生）になる夢は捨てていません。」たとえ子供たちがそれほど優秀でなくとも、子供たちを精一杯励ましてあげるつもりだと彼は付け加えています。「だれでも失敗はするものです。子供たちに、失敗したからと言ってそれで世の中が終わりだなどと思わせないようにしなければなりません。次の時に、うまくいくかもしれないのです。大切なのは賞を得ることはありません。努力し自己の向上をはかることです。子供たちが最善を尽くしているのなら、それが彼らにとってはベストの状態なのだと思います。」

ミサルチャー家は教会での活動、勉強や

仕事の面の成功、家族の絆がもたらす喜びを味わっていますが、彼らの生活の中で最も大きな喜びと言えるのは、恐らく父親がセブに移って来て見つけた幸福の秘訣を人人に分かち合うことでしょう。

「ぼくは、この教会が唯一の真実の教会であることを証することができます。」こう言っているのはベルミンです。「ぼくは、時々悪いことをしないように友だちに勧めることがあります。すると友だちは確かにそうだと言います。例えばタバコの害などについて話をすると、彼らは『そんなに害があるとは知らなかった』とよく分かってくれます。なんだか彼らに警告しているみたいです。それに授業をさぼったり、良くない映画を見に行ったりしないようにも説得しています。」

「ぼくの友だちの多くは、福音が真実であることを知っています」とベンソンが話しています。「しかしどうしても打ち破れない壁があるようです。彼らはよくこう尋ねます。『君はどうしてぼくに変わって欲しいと思うんだい』と。頑固なんですよ、もともと生まれた時からそういう生活でしたからね。ぼくは彼らに今以上に幸福になってもらいたいと思っているんです。」

「私は毎日祈りによって一日をはじめます。」そう語るのはベレングです。「学校のクラスメートたちは、教会についてとても興味を持っています。私がモルモンだということが分かると、『なぜお酒を飲まないの』などいろいろな質問をします。そのたびに私はそれは教会の教えだし、体にも良くないからと理由を説明してあげます。」

ミサルチャー兄弟は、友人のラリー・ユ



マルに福音を紹介した時のことを次のように話しています。「彼は私になぜ末日聖徒になったのかと尋ねました。そこで私はより多くのことに答えを与えてくれる教会、教えを実践している教会、私たちが今まで知らなかったことを教えてくれる教会を捜し求めていたことを話しました。」

それから2カ月半後、ユマル兄弟は教会に改宗しました。彼の隣人で、神を汚すような言葉を使ったり、ギャンブルをしたり、彼の家の前にゴミをどっさり捨てていくような人がいました。しかしユマル兄弟の彼に対する態度は変わりました。「彼はその隣人を良き隣人として扱うようになり、その人にとって良きクリスチャンになろうとしたのです。」ミサルーチャ兄弟はそう説明しています。「今まで粗野な生き方をしていたその隣人が生活を変え、教会に入ったのです。そして彼はその福音を他の家族に紹介し、その家族をバプテスマに導きました。そして今度その家族は宣教師に他の家族を紹介し、その家族もまた改宗したのです。」

そのような経験から、ベンソンは明らかな教訓を得ました。「自分の言いたいことを他の人に聞いてもらう一番の方法は、その人を心にかけていることを、行動で示すことです。彼らに話しかける前に、まず彼らと友達になり、安心させることです。ほとんどの学校には島中から生徒が集まって来ています。ですから宗教が違うこともそうめずらしいことではありません。モルモンとして自己主張することは簡単ではありませんが、友人に自分の信条を話すことはできます。」

「持てるものを分かち合おうとするフィ

リピン人の姿勢は、教会の成長の大きな力になると思います」とミサルーチャ姉妹は話しています。「自分たちの生活に大切なものを分かち合うのは当然のことですし、福音は最も大切なものです。フィリピン人が分かち合うことを当たり前のこととして行なっているのだとしても、そのような態度は福音の光によってますます強められます。フィリピン人はいつも幸せな気持ちにひたっている人々が多いのですが、そんな彼らでもモルモンに出会うと非常に感銘を受けます。それは、回復された福音にそった生活をしている人々は何か独特のものを持っているからです。」

ミサルーチャ家を訪問する教会員でない人々が心の中にそのような温かいものを感じながら家を後にするのは、そのためではないでしょうか。「私たちは彼らに家庭の夕べについて教え、福音がいかに家族をまとめ、仲良くさせてくれるかについて話します」とミサルーチャ兄弟は語っています。

「あなたの知り合いの人々に最も影響を与えることができるのはあなたです。なぜなら彼らと同じ経験をし、彼らの生活に直接かかわることができるからです。」

ミサルーチャ家がセブ市に着いた時、彼らはまだ福音を知りませんでした。しかし彼らはここで、今も永世にもわたって完全な、そして幸福な家庭生活を送る方法を見いだしたのです。彼らにはその秘訣を長く人々にかくしておくことはできそうもありません。



# バ|ラ|ン|ス|を|保|つ

福音を實踐する上で、  
行き過ぎた点がないかどうかを考え、  
調和のとれた生活をする

O・ドン・オスラー



天父は私たちが救い主のような完全に均斉のとれた人格の形成を心がけていくなら、導きと教えを与えて下さいます。天父の目指すところが、私たちを教え導くというこの点にあるのを知るのには素晴らしい慰めです。



**19** 81年4月下旬、世界初の宇宙往復船スペース・シャトルが軌道に向けて発射されました。数次にわたる自力飛行テストの第1回目に挑み、2日間にわたって地球の周りを飛行しました。

地上では、コロンビア号が再び大気圏に突入し、カリフォルニア州にあるエドワード空軍基地に着陸するのを、人々が緊張した面持ちで待ちわびていました。この時の着陸の正確さは驚くべきものでした。スペース・シャトルは時速29,000キロの速度で大気圏内を下降し、徐々に適正なスピード

に落としながら、幅数百メートル、距離にして数キロ程の滑走路へ完璧な着陸をやってのけたのです。それはこの惑星全体から言えばほんの点のような場所でした。

私たちが永遠の両親の下に霊の子供として暮らしていた時から、この地上での経験を経て、ついには日の光栄の王国へと帰ってゆくその旅路は、ある意味でコロンビア号の宇宙旅行に似ていると言えます。私たちはこの旅路の中で、無事神の下へ帰るための知識と経験、つまり私たちが持つ永遠の可能性に到達するための知識と経験を身につけなければなりません。私たちがこの地上で行なうあらゆる事柄は、来世でどの地点へどのように着陸するかに影響を及ぼします。

悲しいことですが、永遠の世界に再突入する時に、私たちの多くは自分が目標を見失ってしまったことに気づくでしょう。ある人々は星の光栄や月の光栄に、またある人々は日の光栄に着陸します。思うに、この差は私たちが聖霊の導きによるバランスのとれた生活を築いていけるかどうか、その能力に左右されるのではないでしょう。

コロンビア号の宇宙飛行が成功したのは、適切なバランスが保たれていたためでした。熟練した技術者に操られてコロンビア号は幸運にもほどよいバランスのとれた速度、方向、タイミングを得て宇宙空間に飛び出し、完璧な飛行を遂げ、無事帰還しました。しかし、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員として私たちが得ている導きは、これとは比較にならないほど確実なものです。なぜなら、それは人の霊の救いをつかさどる神から来るものだからです。この世の旅路の間、私たちには案内役として聖典と「みたま」が与えられ、さらに私たちを導く予言者が与えられています。スペンサー・W・キンボール大管長は主の代弁者として私たちに救いを確実にするための道を教えてくれています。

予言者の勧告は分かりやすく、はっきりとしているのですが、それにもかかわらず、人は時として道を外しそうになります。ある会員たちは、都合のよい時には予言者に聞き従おうとするのですが、犠牲やさらに大きな献身が求められると耳を傾けようとしません。またある会員たちは福音の単純さを忘れて、ひとつのことだけを強調し、ほかの部分をおろそかにすることがあります。また、自分たちに与えられた導きをわざわざ難しく受け取って分かりやすい神の助言をあいまいなものにし、霊的なバランス感覚を失ってしまう会員もいます。中にはうわさ話、狂信、誤った道徳観や価値観、おごりな信仰の犠牲になっている人々さえいます。

私は自分の経験から、大抵の間人は憶測に引きずられやすいことを知りました。この点については末日聖徒といえども決して例外ではありません。「もう聞いた?」「ねえ、知ってる?」「だれにも口外しないなら教えますよ。」こうした方法は必ず、たちまちの内に人々の注意を引き付けます。大抵その後にはうわさ話が飛び交います。その内容は、次の監督やステーク部長は誰かといった類のものから、福千年到来の時期に至るまで様々です。

しかしながら、予言者たちは私たちに深い関心を持って勧告しています。信仰と希望にあふれた予言者たちは神を知り、神から与えられた靈感を私たちに示してくれます。その上、私たちは「みたま」に耳を傾けることによって、いつでもその靈感が神から来たものであることを知ることができるのです。悲しいことですが、私はある人人はいろいろな形の行き過ぎに陥りがちな傾向にあることが分かりました。例えば、食べ過ぎる人がいるかと思えば、健康維持に必要な栄養の摂取に無頓着な人もいます。寝過ぎの人もいれば、睡眠時間が足りない人もいます。また適切に体をいたわり体調を整えることをなごりにする人がいるかと思うと、自分の肉体を崇拝せんばかりにしている人もいる有様です。確かに私たちは自分の体の健康と維持のためにあらゆる新しい知識を、できる限り得る必要があると思います。しかし、主は私たちが知恵と常識を用いるよう期待しておられるのではないのでしょうか。鍵となる言葉は、 balan

ストと中庸です。つまり、ひとつの真理だけを特別視するのではなく、自分の知っているすべての真理を思慮深く応用することで。

バランスをとることはレクリエーションや娯楽の面でも重要です。なるほど、仕事ばかりしていて遊びがなければ人間はばかになるという諺は真実ですが、しかし家族や仕事や霊的成長に対する責任をそっちの



ある会員たちは、都合のよい時には予言者に聞き従おうとするのですが、犠牲やさらに大きな献身が求められると耳を傾けようとしません。



けにしてレクリエーションのことばかり言っていたのでは自分の楽しみしか頭にない人間になってしまいます。人は自分の家族をないがしろにしたり、あるいは適切でない模範によって仕事や人々への関心よりも遊びや物欲の方が大切だという考えを子供たちに植え付けてしまうこともあります。

ジョセフ・F・スミス大管長は、中庸についてこのように語っています。「聖徒は愚かであってはならない。むしろ主のみこころが何であるかを知って、すべてのことに中庸を保たなければならない。聖徒たちは『人間の欲情』を遠ざけ、行き過ぎを避け、

罪を犯さないようにしなければならない。そして娯楽を楽しむ時は文字だけではなく精神も、行為だけでなく意図も、また部分ではなく全体に気を配る道を取りなさい。それが中庸の意味である。このようにすれば、彼らの行動は道理をわきまえたふさわしいものとなり、主のみこころを理解するのに何の困難も感じないだろう。」（『福音の教義』p. 232）

信仰の実践という面においても、私たちは生活のバランスを見失ってしまうことがあります。特定の事柄にだけ力を注いで、大切さにおいて何ら変わることはない他の責任をないがしろにしている場合は特にそうです。聖典の勉強、親としての務め、人々への奉仕、教会の召し、これらすべてがそれ相応の時間を必要としています。ひとつのことにだけ力を入れてほかのことを全部おろそかにするようでは救い主の期待に応えることはできません。主はそれもしなければなりません、「これも見のがしてはならない」（マタイ23：23）と教えておられます。

定員会集会や福音の教義クラスが霊的な進歩や奉仕のための原則を学ぶ場ではなく、公開討論の場になってしまうことが時々あります。私たちは往々にして実のない話し合いに興じ、未亡人や病人や苦しんでいる人々の必要を満たすために何をすべきかという点について真剣に考えるのを怠ることがあります。

「人は努めて良き業に従い、多くの事をその自由意志によりて為し、多くの正しき

事を為し<sup>と</sup>げよ」(教義と聖約58:27)と主は宣言されました。神の王国は、時間、才能、財産を惜しみなくささげる人々によって打ち建てられてゆくことでしょう。今日、世界的な規模に成長した教会では、伝道のための働きや援助、神殿活動や神殿の建築、惜しみない断食献金と貧しい人々への心からの関心、家族の教育とそのしつけなど様々な事柄が求められています。各ステー



定員会集会や福音の教義クラスが靈的な進歩や奉仕のための原則を学ぶ場でなく、公開討論の場になってしまふことが時々あります。



キ部においても、求められている事柄は多少異なっているかもしれませんが、その重要性において劣ることはありません。質のよいホームティーチングや家庭訪問、慈善奉仕、病人への訪問、隣人への奉仕、効果的な指導、優秀な教師、これらは時と場所とを問わず切実に求められているものなのです。

自分自身に問うてみようではありませんか。自分に与えられている時間、才能、財産をどのように用いているでしょうか。目標に向かって歩んでいるでしょうか。それともこの世的な事柄に多くの時間を費やし過ぎたり、才能を仕事にばかり向け、財産を

勝手気ままな楽しみにだけ用いたりして、目標から外れた生活をしてはいないでしょうか。救い主の純粹な教えに心を留めているでしょうか。

誘惑はしばしば巧みにしかも秘かにやって来ます。人の弱い部分につけ込んで、一番その力に屈しやすい時をねらってやって来るのです。「試みる者」はそのようなやり方で人々の生活のバランスを崩し、私たちが神のみもとへ帰る道から遠ざけようたくらんでいるのです。

復活したキリストはニーファイ人に姿を現わされた時、次のような質問をされました。「汝らはいかなる人物にてあるべきか。」主は御自分の質問に、御自分で答えられました。「まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(Ⅲニーファイ27:27)

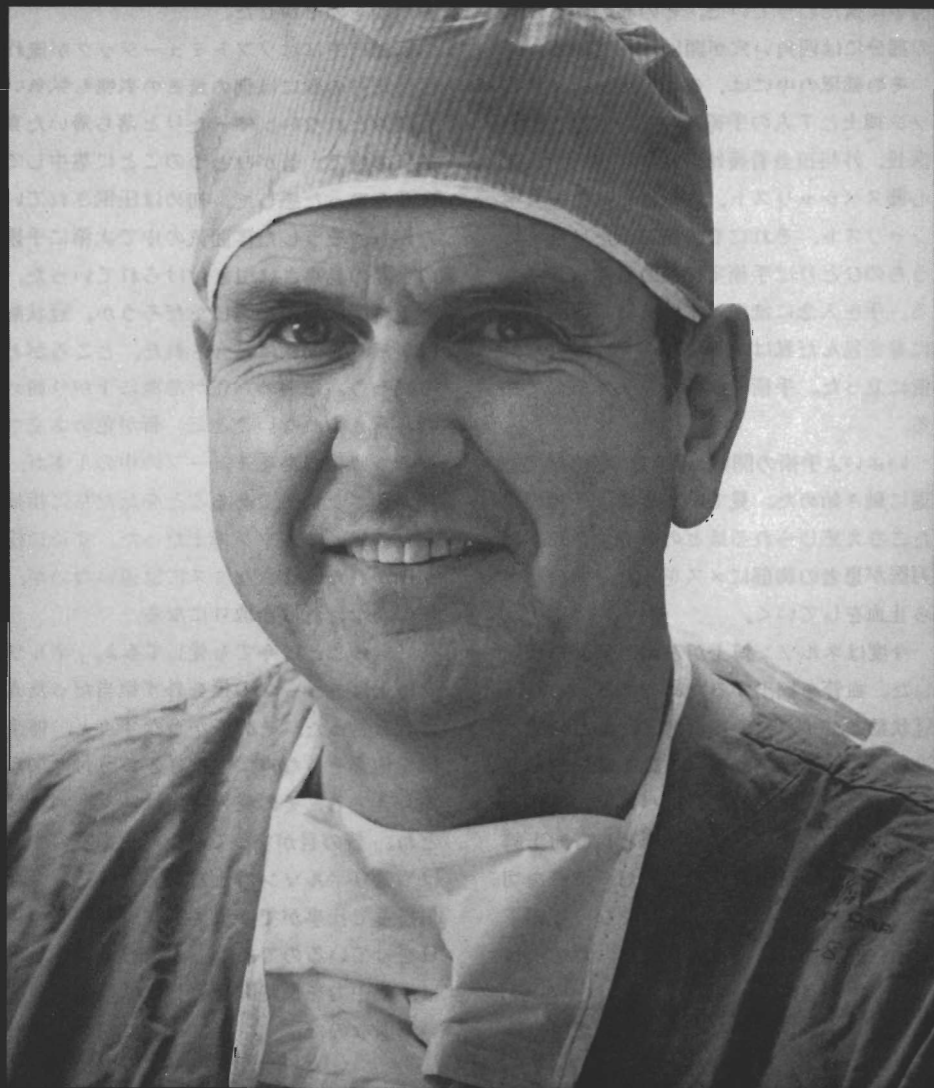
バランスのとれた生活をするためには、私たちは皆、様々な問題、誘惑、また行き過ぎた点や不十分な点などと戦っていかなければなりません。イエス・キリストは全人類の文字通りの救い主ですが、私たちはそれを知る者に与えられる力を必要としています。キリストの贖いと救いの恵みは靈と肉体の死に打ち勝ち、終わりまで耐え忍び永遠の住まいへ帰るための力を与えてくれます。天父は私たちが救い主のような完全に均齊きんせいのとれた人格の形成を心がけていくなら、導きと教えを与えて下さいます。天父の目指すところが、私たちが教え導くというこの点にあるのを知るのには素晴らしい慰めです。

---

# 心臓外科医ラッセル・M・ネルソン と従順

レーン・ジョンソン

---





**鈍**い光を放つ無数の器具が、まるでジャングルのように、明るく照らし出された手術台を取り囲む。そして台の上には、特別な緑の布で体を覆った60歳の男が静かに横たわっていた。その布の胸と左脚の部分には四角い穴が開けられている。

その部屋の中には、ラッセル・M・ネルソン博士と7人の手術チームがいた。外科医長、外科担当看護婦、麻酔担当医、人工心肺スペシャリスト、コンピュータースペシャリスト、それに看護婦がふたり（そのうちのひとり手術室付きの看護婦）である。手を入念に洗浄し、滅菌済みの手術着に身を包んだ私は、彼らから少し離れた位置に立った。手術の模様を見学するのである。

いよいよ手術の開始。皆自分の持ち場で敏速に動き始めた。見ている者には一種の冷たささえ感じられるほどの手際よさだ。執刀医が患者の胸部にメスを入れ、その後から止血をしていく。

今度はネルソン博士が左脚の部分を開切した。血管を摘出するためである。これは冠状動脈バイパス手術と呼ばれるもので、患者の心筋を動かしている動脈に閉塞状態が生じたので、その部分にバイパスを作る手術である。そのバイパス用として、上脚部から摘出した血管を使うのだ。血管を切るはさみの音。私はたまらなくなつて廊下に出た。そして深呼吸をすると、意を決して再び手術室に入った。

電気ノコギリがうなっている。患者の頭

の方にまわつた私の前で、ノコギリで胸に縦に入れられた切り込みが、機械のクランクの回転と共に左右に押し広げられていく。そしてその下から、規則正しく鼓動する心臓が顔をのぞかせた。

部屋の中にはソフトミュージックが流れ、医師たちの顔には何の驚きの表情も気負いも読みとれない。ゆったりと落ち着いた雰囲気の中で、皆がひとつのことに集中しているといった感じだ。初めは圧倒されていた私も、そうした雰囲気の中で次第に手術の手際の見事さに引き付けられていった。

1時間は優に経過したのだろうか。冠状動脈が無事大動脈に結合された。ところがどうだろう。患者の血圧が急激に下がりはじめた。考えられないことだ。皆が色めき立つ中で、無数にあるチューブの中の1本が、栓が閉じたままであることをただちに指摘したのは、ネルソン博士だった。すぐに栓が開かれた。小さなミスには違いないが、気づかなければ命取りになる。

「君のことは今でも愛してるよ。」ネルソン博士はチューブの栓を外す担当だった人にそう言った。その人がうなずくと、博士は意地悪そうな声ですぐさまこう付け加える。「もちろんその愛の程度は時々変わるけどね。」皆の目が笑っている。手術室の中心はやはりネルソン博士だ。メンバーが楽な気持ちで仕事ができるように、雰囲気づくりをしているのである。手術室というものは、集中力を長時間持続しなければならない場所なのだ。



ネルソン博士は、後でこう語ってくれた。「かなりの自制心を要求されますね。患者さんの生死が我々チームにすべてかかっているわけですから。そうです。沈着冷静かつどんなミスも見落とさない態度が必要です。」

手術開始後4時間が過ぎた。手術はほぼ終了の時点まで来ている。人工心肺は取り除かれ、心臓に電極によるショックが与えられた。移植された血管が、新たに送り込

まれた血液でさっとふくらんでいく。そして最後は血液のもれがないかどうかの検査だ。

こうして心臓は元通り自分自身の力で動き出した。患者も安定した状態を保っている。患者の家族のことが心に浮かぶのはこの時点まで来てからのことだ。看護婦のひとりが受話器を取る。「バイパスが終わって人工心肺もとれましたので、あと45分程でネルソン博士がそちらに参ります。」

#### ネルソン家族と孫たち







これと同じような心臓手術は、アメリカでは年に10万件以上も行なわれている。ネルソン博士はこの分野では草分け的存在で、もう30年以上もの経験を持っているが、心臓手術の技術的進歩には目覚ましいものがあり、今では98パーセントの成功率を得るまでに至っている。

ネルソン博士の医師としての教育は、1942年のユタ大学2年の時点までさかのぼるが、以来彼の心の中に形成されてきた医学に対する見方は実に簡単明瞭だ。博士はこう言う。「患者の問題を分析する医師として非常に重要なことがひとつあります。それは、患者の症状が時間の経過に従って良くなる状態にあるのか、それとも悪化する方向にあるのかということです。医師に課せられた任務は、悪化する状態の患者を時間がたてば良くなる状態へと変換することなんです。」

この務めを果たすに当たって医師は、自分には人を癒す力がないのだということを悟らなければならない。神から人間一人一人に付与された患者自身の内にある生命力に依存しなければならないのだ。ネルソン博士は、教義と聖約を引用してそのことを説明する。「そもそも創世の以前より天に於て定められた一つの<sup>おきて</sup>変らざる律法ありて、あらゆる祝福はこれに基くなり。

すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時は、この祝福の基く律法に従うによりて<sup>しか</sup>然るなり。」(教義と聖約 130 : 20—21)

ネルソン博士はこう続けた。「つまり、祝福があるのは律法に従っているからなんです。もっと言えば、律法を守れば、ほとんどの場合とか時々とかいうのでなくて、いつでも、例外なく祝福があるということです。これが分かれば、人間の肉体を統御する律法を学びそれに喜んで従う私たち医師は、もっと気持ちが楽になりますね。そうでなければ毎日人を死なせたり生かしたりしていることになるわけですから、間違いになりますよ。」

彼が将来妻になるはずのダンツェル・ホワイトに会ったのは、ユタ大学でのことだ  
心臓の拡大モデルを調べるネルソン博士





った。当時の様子をこう語る。「それまで会った女性の中で最も美しい人だと思いました。すぐに、結婚するのはこの人だって感じましたね。」ダンツェルも同じだった。ユタ州ペリーの自宅に戻ったダンツェルは結婚相手にめぐり会えたことを両親に報告、ふたりはそれから3年後にソルトレーク神殿で結婚した。

1944年にユタ大学のメディカルスクールに進級した彼は、4年の課程を3年で修了、次いでミネソタ大学病院でインターンを行ないながら通常の外科医としての訓練を受け、博士課程の研究へと歩みを進めていった。また当時、手術中の心臓に代わって患者の心臓と肺の働きをする器械を開発するために、5年間の研究補助金があるチームに許可されたが、彼もそのチームの一員であった。問題は数え切れないほどあったが、ほぼ3年間の努力の後に試作品が完成、1951年に初めて使用された。

しかし彼は、こうした研究の最先端を歩むという機会を捨てて、家族共々ソルトレーク・シティーに移った。当時妻は5人目の子供の出産をひかえていた。移転後はユタ大学医学部助教授として教べんをとるかたわら、研究と医療を続けた。当時の模様を彼はこう語る。「あの頃の心臓手術は、海図のない航海のようなものでした。」つまり、成功した時の幸福感もさることながら、患者が助からなかった時の挫折感はたとえようもないものだった。

それから25年、彼の患者に対する気遣い

の心は変わらない。「今の心臓手術はかなり高い成功率を誇るようになってきました。でも、ひとり残らず救えるわけではありません。それは不可能です。ある時は、ただ安らぎしか与えられないことがあります。希望を打ち砕くようなことはしたくありません。医師の務めは、時には癒<sup>いや</sup>し、しばしば苦しみを和らげることです。しかし、安らぎを与えるという務めは常に果たしていかなければならないものです。」

1959年にユタ大学を辞した彼は、個人開業に踏み切った。35歳で6人の子供を抱えていた時である。大学での研究生生活が長かったことや研究分野が特殊だったこともあって、借金がたくさんあった。

それだけではない。当時彼はステーキ部長という重責に召されていた。按手任命に先立ち、ネルソン兄弟は自分が直面している課題を率直に話した。大動脈弁の交換という課題である。それに対して、任命を担当した当時十二使徒定員会会員だったスペンサー・W・キンボール長老は、医師としての技術が高められて、患者に負担をかけることなくステーキ部長の職を全うできると祝福した。その祝福の恩恵は、キンボール長老自身が受けることとなった。1972年、ネルソン博士の執刀による大動脈弁の交換を伴う心臓手術を受けたのである。

1965年、またとない機会がネルソン兄弟にめぐってきた。ある大きな大学の心臓外科で、教授兼学部長として働くように要請されたのである。それには高額<sup>たいがく</sup>の給与のほ



かに、子供たち全員の大学での教育費全額を負担するというおまけまでついていた。

ネルソン兄弟姉妹はこの要請を過分なことと考え、九分九厘受けるつもりでいた。しかしその決定が家族のみならずステーク部長としての責任にも影響を及ぼすものだったので、彼はデビッド・O・マッケイ大管長に相談した。

話の内容を詳細にわたって聞いたマッケイ大管長は、目を閉じて椅子の背もたれによりかかり、しばらく考えていたが、口を開いてこう言った。「ネルソン兄弟、私はあまり気が進みませんね。シカゴへは行かない方がいいと思うのですが。」

ネルソン兄弟が期待していた答えだった。「それで私たちは要請を丁重に断わり、ソルトレーク・シティーに残ることにしました。」

1971年6月、ネルソン兄弟はN・エルドン・タナー副管長からオフィスに来るように電話を受けた。オフィスに行くと、ハロルド・B・リー副管長も同席していた。(当時ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は体調が思わしくなかった)リー、タナー両副管長からの話は、仕事上差し支えがなければ教会中央日曜学校会長として働いて欲しいというものだった。

驚きからようやく我に返ったネルソン兄弟は、主からの召しであればたとえ医師としての仕事をやめてでも従いますと答えた。しかし大管長会からの要請は、医師としての仕事を続けることができるという条件で

召しを受け入れて欲しいというものだった。ネルソン兄弟の会長としての召しは、それから8年も続いた。

キンボール大管長(当時十二使徒定員会会長)が手術を受けたのは、その次の年の4月12日のことである。この時の手術は完璧そのものだった。ハロルド・B・リー、N・エルドン・タナー両副管長の祝福通りである。しかしそれだけではなかった。手術が終わった時に特別な気持ちを感じたのである。こう語っている。「将来大管長になる人に手術を施したのだとみたまが告げたのです。」

1979年に中央日曜学校会長の責任を解かれた彼は、その後地区代表として働いている。医師としての多忙な生活は今も変わりがない。心臓手術を日に2度行なうこともある。また医師会や地方自治体の仕事にも活発に取り組んでいるし、まだ独立していない子供もいる。

こうした多忙な毎日の中で、彼は家族との時間をどのようにして見だしているのだろうか。ネルソン兄弟姉妹と子供たちとの絆は特別なものだ。妻のダンツェルには、子供たちを引き付ける才能がある。

ネルソン兄弟は、父親、夫としての経験についてこう語る。「やはり主が望んでおられることを行なっている時が一番満足できますね。」そのことについて彼は、興味深い経験をした。グランド・キャニオンをいかだで旅していた時、彼と娘のグロリアが急流でいかだから放り出されたのである。



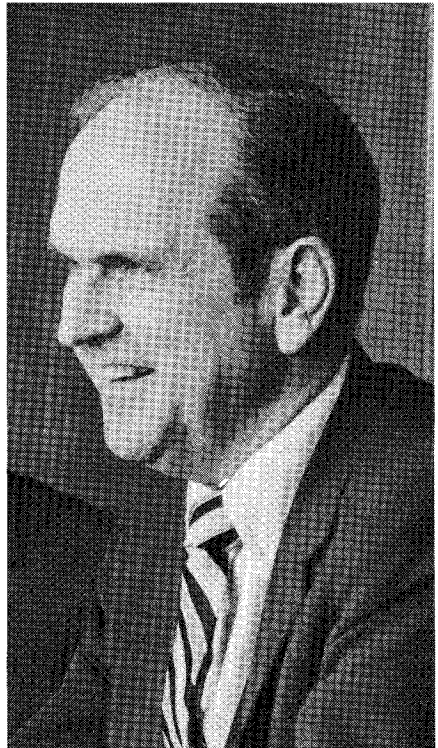
「恐ろしい経験でした。でも鉄の棒にしっかりつかまることを教えてくれましたよ。流れが急なところに来た時、私は娘がいだから落ちては困ると思い、一生懸命娘をつかまえていました。でも後でもっと流れが急な所に来た時には、私がロープにしっかりつかまって、娘には私の体につかまっているように言いました。同じことが福音を守ることも言えますね。もし父親が知恵の言葉の原則にしっかりつかまっていれば、家族は皆父親に頼ることができ、家族は皆安全だというわけです。」

ネルソン兄弟は医学や地域社会奉仕に関連して数々の表彰を受けてきた。また合衆国胸部外科理事會会長、ユタ心臓協會会長、ユタ州医療協會会長など、要職も数々歴任してきている。しかしそうしたものをすべて超越したものが彼にはある。それは、神の王国を發展させるために主に従って歩もうという決意だ。

彼はこう語る。「教会の中で、主がまだ果たしておられないことがたくさんあります。主はふさわしい人々をすべて必要としておられます。備えのできた資格ある末日聖徒は、兄弟も姉妹も皆自分の肩に担うべき仕事があるのです。」

「キンボール大管長が言われることには全部従わなければならないのですか。」人々がそう言うのを聞いて、ラッセル・M・ネルソンは落胆する。

「主は『わが声にて言われるも、僕らの声にて言われるもみな一つなり』と言って



地区代表としてステーキ部長と共に集会を開いているネルソン長老

おられますね。ですから、予言者の言葉の最後に疑問符をつけないで逆に感嘆符をつけただけでいいでしょう。そして実行するんです。そうしたら祝福がたくさん得られますよ。私は、大管長はいつ予言者として語っていて、いつ普通の人として語っているのだろうかとは言いません。私が関心を持っているのは、どうしたらもっと彼に近づくことができるだろうかということです。」



ちい

とも

# 小さなお友だちへ



## 主はよみがえりぬ

バージニア・サージェント

週しゅうのさいしよのひひがあけると、  
 マグダラのマリヤおんなは女たち  
 と一しよに、イエスさまのおは  
 かへといそぎました。イエスさ  
 まのからだからだに、香油こうゆをぬらなければ  
 ならなかったからです。

みちみちおんな、女たちは、おはか  
 の入口いりぐちをふさいでいるいしいしをどう  
 やってうごかそうかと話し合はない

ました。でも、おはかについて  
 みると、おどろいたこといしに石は  
 もうとりのけてありました。

女おんなたちは、おはかの中なかに入っ  
 ていきました。すると、中なかには  
 白しろいころもをきた男おとこのひとひとがいて、  
 こういいました。「こわがらな  
 くていいのですよ。イエスさま  
 は、もうここにはおられません。

夫みかえられたのです。「  
 女たちは、一体何が occurred  
 のかわかりませんでした。ア  
 ラのアライは走っていて、  
 アフロとヨイスを見つけたとい  
 いました。「だから、アエ  
 さまの体をどこかへもってい  
 てしましました。」  
 アフロとヨイスは、アアラ  
 のアライと一しに、おはか入  
 走っていききました。中へ入  
 みるに、本堂にアエさまの体  
 はなくってしまいました。  
 アフロとヨイスが行ってしま  
 うに、アライはなきながら、お  
 はかの中をのぞきこみました。  
 すると、どうしよう。アエ  
 さまの体があったところ、男  
 の人がいたり、ごしかけている  
 ではありませんか。アライは、  
 その男の人たちが夫のみつがい  
 だとは気づかず、おはかの番人  
 だと思つて、ごいしました。  
 「あなたが一エさまの体をど  
 ころへおうつししたのなら、ど

こへおうつししたのか教えて  
 下さい。」  
 すると、おそろやさいし  
 がしました。「アライよ。」  
 アライは、それがアエさま  
 の声だと気づいてはいるが、う  
 れしさのあまり大声で、「アホ  
 二」といいました。アホ二とい  
 うのは、先生といひみです。  
 アエさまは、いねました。  
 「わたしにさわってはいけな  
 いよ。わたしはまだ、お父さまの  
 おもとへのほつていないのだか  
 ら。兄弟たちとごころへ行つて  
 わたしのことをごつたえておくれ。  
 わたしは、お父さまのおもとへ  
 行くから。」  
 アアラのアライは、うれし  
 げな顔がはいはれになり、ご  
 したちのとごころへ走つていきま  
 した。そして、アエさまにお  
 会いしたごと、アエさまがひ  
 つかつされ、生きておられるこ  
 と、アエさまとお話をしたこ  
 とを、ごつたえてました。

# コマドリは てんごくへいくの

アリス・ストラットン<sup>きく</sup>作より



「これは、なんのあなだい。」パパがききました。

「おはかだよ。これから、コマドリのおそうしきをするの。」あつくんは、こたえました。

「パパも、おそうしきにいってもいいかい。」

「もちろん。」

そこへ、サッコちゃんがしずかに、ちいさなほこをもつてやってきました。サッコちゃんの後には、マリちゃん、そのあとにはカツロウくん、そのあとにはユカちゃんがつづいてきました。みんな、デージーや、タンポポ、パンジー、シバザ

クラなどのおはなをもっています。コマドリのおはかに、かざるのです。

ママも、やってきました。ママは、ラッパスイセンをもっていました。

サッコちゃんが、ききました。「ねえ、ママ。コマドリはてんごくにいけるの。」

「そうね、いけるとおもうわ。」ママは、パパのおをみながらこたえました。

「ところで、どんなおそうしきをするのかな。」パパが、ききました。

「あのね、コマドリさんがよろこぶように、みんなでうたをうたって、それから、おいのりするの。」あつくんがいました。

そして、おそうしきがはじまりました。「<sup>てん</sup>天のお<sup>とう</sup>さまの<sup>あい</sup>愛」(「<sup>こども</sup>子供の<sup>うた</sup>歌」B-59)をうたって、ユカちゃんがおいのりをしました。

そのひのゆうごはんのときは、みんなとつてもしずかでした。

「ねえ、てんごくにはコマドリがたくさんいるの。」あつくんがききました。

「わたし、いるとおもうわ、コマドリも、ツバ



メも、ハクチョウも。」

「それじゃあ、ウサギやリスは？」

「ウマや、ゾウや、ライオンだっているんじゃないの？ そして、みんなきつとたのしくくらししているのよ。」

「そうだね、けんかはしないんだね、きつと。」

サッコちゃんも、あつくんも、カツロウくんも、ユカちゃんも、みんなきゆうに、げんきになっておしゃべりをはじめました。

すると、いちばんおねえさんのサッコちゃんがききました。「ねえ、パパ、ママ、せいてんには、どうぶつたちのことをなんてかいてあるの。」

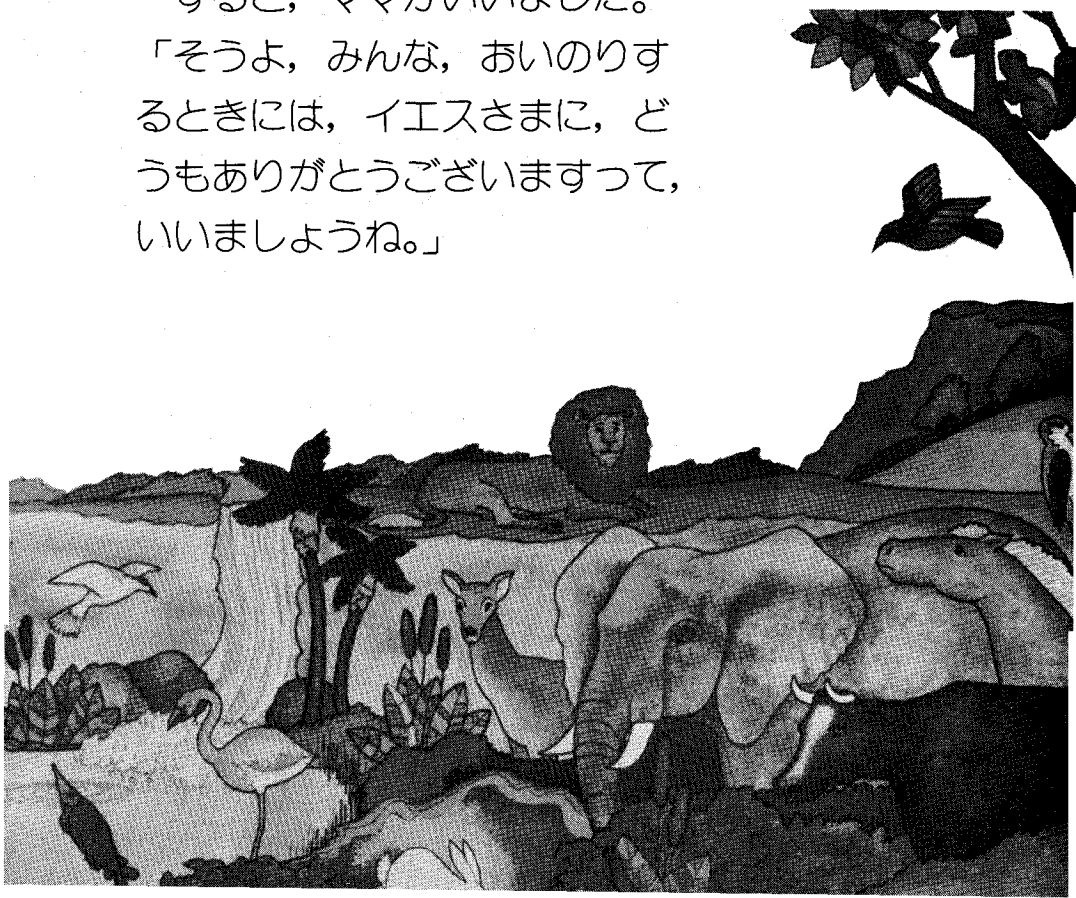
パパは、いいました。「そう、せいてんにはね、いきてうごくもの、つまり、にんげんも、どうぶつもみんなふっかつするって、かいてあるんだよ。すくいぬし、イエスさまはね、にんげんも、どうぶつもふっかつできるようにしてくださったんだ。だから、ライオンも、クマも、ウサギやリスも、ネコも、イヌも、ふっかつできるんだよ。」

「それじゃあ、てんごくにいったら、どうぶつたちもぼくたちといつしよにくらせるんだね。」  
カツロウくんは、めをかがやかせながらいいまし

た。

すると、マリちゃんがいました。「わたし、てんごくって、すごくいいところだとおもうわ。てんごくには、かぞくがいて、おはなもさいてて、くだものもなっているのよ。ペットだって、かえるかもしれないわ。わたしたちイエスさまに、ありがとうございますって、いわなくてはいけないとおもうわ。」

すると、ママがいました。  
「そうよ、みんな、おいのりするときには、イエスさまに、どうもありがとうございますって、いいましようね。」



ひどくさむい4月のことだった。みぞれまじりの風がふきすさぶくらい夜道を、ダニーはまきばに向かって走った。コートのを立て、あごをえりの中にうめながら。

かこいの戸をあけて、ひつじたちに電とうをむけると、みぞれの中からメエー、メエー、とおびえた声がした。ぬれたひつじの毛のにおいがむんむんする中を、ダニーはやさしくひつじをかき分け、かき分け、歩いた。

## おにいちゃんのために

ナネット・ラーセン



「ブラッキー、スージー、スポット……。」ダニーは一頭一頭名前をよびながら、数えた。

イギリスへ伝道に行ったおにいちゃんからあずかった、大切なひつじだ。ダニーは、おにいちゃんが大好きだった。だから、こんなあらしの夜でも、なまけずにひつじの数を数えた。ダニーは思った。『ぼくも、いつかきつと伝道に出るんだ。』

「ハッピー、サニー、サダイス、それからバシュフル、そこにかくれているのはフラッフィーだな。」ダニーは、数える

のが<sup>たの</sup>楽しくなってきた。

ダニーは、<sup>でん</sup>電とうでつぎ  
つぎとひつじをてらした。

「まてよ、まてよ。ベツ  
ツイーはどこだ。」いくらさ  
がしても、ベツツイーはい  
なかった。



ダニーは、外へとびだした。みぞれが顔につきささるよう  
にふきつけてきた。「ベツツィーには、もうすぐ子ひつじが  
生まれるんだ。おにいちゃんの大好きだったベツツィーがい  
なくなったら、どうしよう。」

ベツツィーはみぞれをしのぎたくて、なやの方へ行ったの  
かもしれない。しかし、なやのあたりを見まわっても、風の  
音がするだけだった。ふきすさぶ風とみぞれをついて、ダニ  
ーはくるったように、北へ南へとかけまわった。大声で「ベ  
ツツィー、ベツツィー」とさげびながら。しかし、ダニーの  
声は、風にふきけされて聞こえなかった。

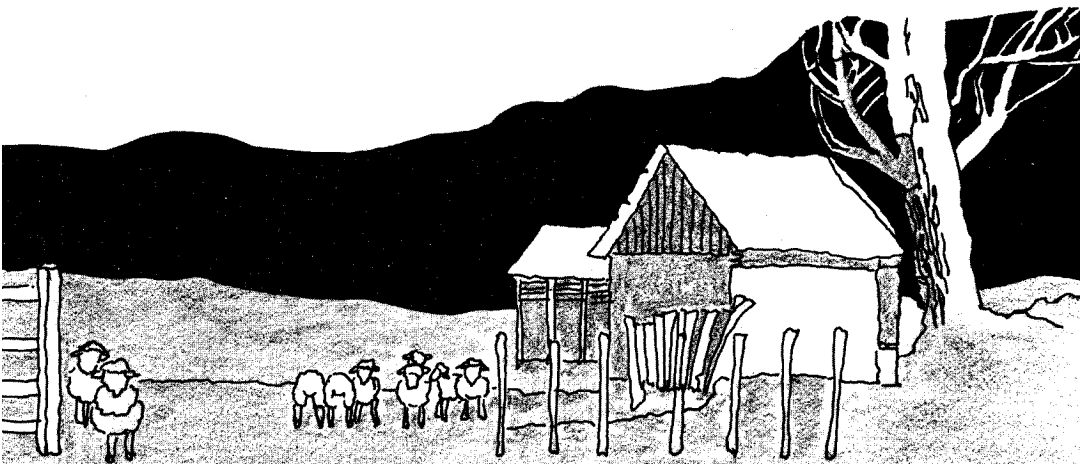
ダニーは、くたくたになって立ち止まった。と、弱々しい  
ひつじの鳴き声が聞こえた。ダニーは、とっさに電とうを声  
のする方へおけた。ベツツィーだ。そして、ベツツィーのか  
たわらには、生まれたばかりの子ひつじが2頭、みぞれにぬ  
れながらミルクをのんでいた。



ダニーは、子ひつじをうでにかかえ、ベツツイーを歩かせて、なやにつれていった。なやの中は、あたたかかった。ベツツイーは、わらの中によこになりながらも、何か心ばいそうに、モゾモゾとうごいた。ダニーはとつさに、何かあると感じた。「何だろう、どうしたらいいんだろう。」ダニーはまよいながら、なやの戸をあげた。すると、風がむちのようないきおいで、ふきつけてきた。

ダニーは、走った。自分でも、なぜそんなことをするのかわけがわからなかったが、気がついた時には、ベツツイーが子を産んだところに来ていた。

ダニーは、水のひあがったみぞの方へ2、3歩あゆみよつた。と、その時、とつぜん足をとられ、と中でふみとどまることもできずに、ずるずるとみぞの中へおちてしまった。ダニーは、どろまみれになりながら、電とうであたりをてらした。すると、何かもり上がったものが見えた。小さなどろの



山やまのようだった。『ひつじの子こだ。ベッツィーは三みつつ子ごを生うんだんだ。かわいそうに。もう、しんでいるかもしれない。』ダニーは、ぐつとなみだをこらえながら、つめたい、か弱よわい子こひつじにゆびをふれた。『まだ、いきがある!』ダニーのむねはおどった。ダニーは、しにかけた子こひつじをコートの下したにつつむと、小走こばしりに家いえへむかった。

「かわいそうに。」子こひつじをみ見るなり、お田かあさんはなき声こえをたてた。そして、すぐにミルクをあたたためてくれた。

お父とうさんも、たすけてくれた。ダニーは、小ちいさな子こひつじを、そつとおふろに入いれた。

それから、お田かあさんが子こひつじをやさしくだきあげて、ゆすりながら、ほにゆうびんでミルクをのませた。その夜よ、ダニーはねないで、子こひつじをさすってやったり、おふろに入いれてやったりした。

そうして1しゆう間かんがすぎ、ベッツィーと三みつつ子ごの子こひつじは、まきばでたわむれるようになった。ダニーは、いつもかんしゃにむねをふくらませながら、そのようすをみ見ていた。

ある日ひのことだった。お父とうさんが、ゆうびんうけのところから、うれしそうにもどってきた。手てには、おにいちゃんの手紙てがみをもっていた。

お父とうさんは、手紙てがみをよ読みはじめた。

「……ロンドンのさむい雨あめの夜よる、ぼくたちは町まちはずれでチラシくばりをしていました。ぼくは、ちよつとホームシック

で、まきばのようすを思いうかべたり、みんなどうしているのかなと考えたりしていました。そんな時でした。なぜか、とつぜん、天のお父さまや、お父さんや、お母さんや、ダニーが、いつもよりしっかりとぼくのことをたすけていてくれるというきもちがしたのです。ぼくは元氣を出して、くらいさびしい町はずれの家を、ぜんぶたずねてまわりました。その時、何がおこったかわかりますか。何けんかの家で、ふくいんを教えることができ、ふくいんについて、いろいろと話し合うことができたのです。ぼくはきっと、お父さんや、お母さんや、ダニーがたすけてくれたのだと思いました。みんなのたすけを本当にありがとう。」

ダニーは、むねをわくわくさせながら、お父さんが手紙を読むのを聞いた。『きっとあの夜だったんだ。きっとそうだ。ぼくがベツツイーの子ひつじを見つけた夜に、おにいちゃんは、ふくいんを聞いてくれる神さまの子ひつじを見つけたんだ。』ダニーは思った。『ぼくは、おにいちゃんのだんどうをたすけているんだ。おにいちゃんのために、まきばで一生けんめいはたらこう。』







ていますね。私も高校で教えていますが、自分の働きいかんで、大きな影響力を与えることのできる、やりがいのある仕事だと思っています。

**沼野** 私も大勢の生徒を前にして教壇に立つ教師には大きな影響力があると思います。例えばそれが末日聖徒の教師であれば、授業の進め方、方針、教材の選択、人柄などの中にも、その人が持つ高い倫理性や福音の精神といったものが現われてくるでしょうし、生徒個人との触れ合いの中でも、人格尊重の精神、自分自身の全人格、信条を感じさせることができるのではないのでしょうか。

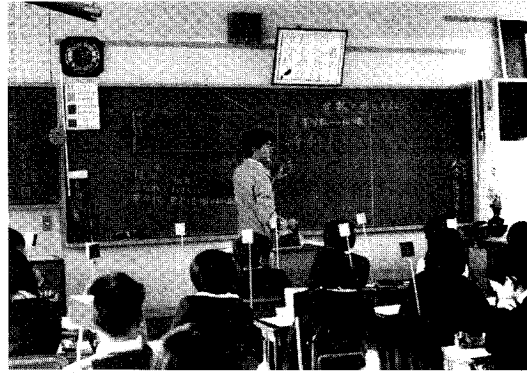
**矢野** 価値観の混乱ということがいわれていますが、これは教師たちの間にもかなりあることなんですね。そういう中で福音を生活に生かし、模範を示すことができれば、私たちは生徒たちに何が善であるかをより明確に指し示すことができるし、宗教を信じることをバカにする社会一般の風潮を改めることもできると思います。

**南本** そうですね。例えば酒やタバコを口にする教師というのはかなりいるわけですが、そのどちらもしない私たちのような存在というのはやはりひとつの指標になり得ると思いますね。

**沼野** 教師が高い倫理を持ち、福音を実践していくなら、直接、間接に生徒や社会に良い影響を及ぼせるはずですよ。

**鮫島** 体験を通して言えることですが、自分の信条に忠実に生活し、正直に仕事をして、いつもはつらつとしている様子は学生たちに良い影響を与えていますね。

**矢野** 地の塩になるというのは、そう簡単にできることではないでしょうが、この



小学校の授業風景（水田正兄弟）

努力を続けていくなら教育問題の大きな要因といわれる失墜した教師の権威も回復できると思いますよ。

**寛** 私も仕事に対する誠実さ、熱心に学び励んでいくことの大切さを少しずつ説いていきたいと思っているのですが、力量不足かまだまだという感じですね。

**沼野** それは私なども同じですね。現実的にはまだまだこれからというところですよ。

**牧瀬** 確かに末日聖徒の教師であるなら、偏見や差別なく生徒を愛し、指導できるし、神の子として守ってやりたいという気持ちで接することもできると思います。補導などの面でも身をもって知恵の言葉を教えることができるし、説得力もあります。しかし、ある意味でこれらのことは、末日聖徒の教師だからどうこうというのではなく、教師としては当然の倫理のような気もするのですが。

**湯沼** 信仰者イコール高い倫理性の持ち主、そしてその感化という図式で影響を与えることは教育者としてはほとんど不可能



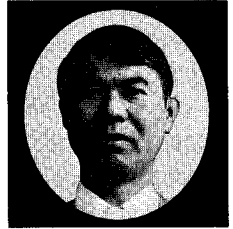
阿部順夫（仙台）



寛 八郎（神戸）



潟沼誠二（札幌）



高良慎清（大阪北）

だろうと思いますね。

**矢野** 自分は福音の原則を守るというだけにとどまらず、もう一步踏み出していく姿勢がやはり必要でしょうね。例えばタバコをすわないというにとどまらず、クリーン・エア運動を職場で積極的に進めていくなれば、嫌煙権などと肩ひじ張らなくても、まわりの方々の健康にも貢献できますよ。

**潟沼** 聖典の中には、イエス・キリストについて、至高の位置に昇りながら、よろずのものの下に身を落とし、罪は犯さなかったが、私たちと同じように試しに合われたと書かれています（教義と聖約88：6；ヘブル4：14, 15参照）、この精神が求められると思うんです。私自身、社会活動をしています。自分は汚くなるが、相手はきれいになるソウキンのようにと。ちょっと誤解を招く表現かも知れませんが。

## 《伝道》

——次に、教師というのは宗教的には中立でなければならないという立場におかれているわけですが、そのことと合わせて、教師としての伝道という点について話していただきたいと思います。

**安田** 私はかねがね「宗教的中立」とい

う言葉に疑問を持っていました。新憲法下の宗教的中立は、多分に戦時中の国家神道に対する反省の上に立っています。そのために宗教の位置付けが非常に後退しています。宗教心が大切であると言われながら、無宗教・無信仰の現実には置かれているのが、教育の実情です。日本の精神的荒廃を招いた一因ですね。

**潟沼** 公教育の場にあつては宗教的に中立を求められているわけですが、憲法においても、教育基本法においても、個人的には信教の自由が保障されています。教育基本法第9条の前段に「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならない」とあり、伝道を慎む必要はありません。個人的には、常に真理に向かうように導くのは当然のことです。

**安田** 教室で福音を生のまま伝えるのは無理としても、あらゆる方法を使って伝道すべきですね。

**潟沼** 問題はモルモンという特殊社会の中でぬくぬくとしているところにあるような気がします。生徒への伝道というのはもっと幅の広いものだと思います。

**寛** 生徒に対しては宗教ということを目に出すと、反発される場合もあると思わ

れますが、私は教師間では一般の人々に対するのと全く同じことができていると思っています。

**牧瀬** その同僚の教師たちについてですが、私の場合も、彼らは私の生き方を見て、モルモンが生活がどういうものか理解しているようです。しかし、なかなかそれ以上のところへは進みませんね。自分たちにはそういう生き方はできないと言います。生徒たちでも、私の服装や言葉などから、他の教師とは違った人生感を持っているということを知っているようです。しかしそれ以上追求してくることがないんですね。自分自身が末日聖徒として正しい生活をしていたとしても、その生き方を生徒や同僚が受け入れてくれるかどうかとなると、分からない部分があります。確かに模範の力は大きいものですが、すぐに効果を表わすとは限りませんからね。

**水田** 私の場合は、生徒や同僚に対して兄弟愛や神の愛をできるだけ実践し、信頼と尊敬の念を育むことで伝道ができるとしています。そうすれば卒業後や学校外で出会った時のための土壌作りになると思うんです。

**矢野** そうですね。福音の中で教えられている徳目を日々の生活の中で実践し、生徒や父兄から信頼されるようになれば、教会の話もしやすくなりますからね。

**松重** 私の場合はホームルームの時間など、折にふれて自分の生活信条について、宗教的言葉を使わず話すように努めています。

**矢野** 私も自分が日曜日に教会に行っていること、知恵の言葉を守っていることは必ず機会をとらえて生徒に話すようにして

ます。それから、学級文庫に稲村兄弟の小説を置いています。教会の名前が出てきますし、教義についてもふれた部分がありますね。それと聖書物語の中の話を、人の生き方を考えさせるひとつの方法として引用することもあります。

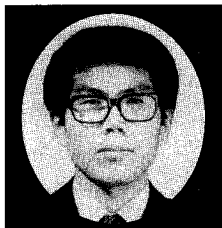
**鮫島** 私は食品を扱った研究をしていますが、講義の中、あるいは社会での講演などの機会に自分の信条を学問的な裏付けをしながら話すことができます。何回もこれを繰り返すことによって、最終的に宣教師との接触にもっていくようにします。

**水田** 私の場合、社会科や家庭科の分野で性と愛と社会の関連や家庭管理学などの新しい科目の研究やカウンセリングなどで教会の標準に沿った内容もかなりアピールできるのではないかと考えています。

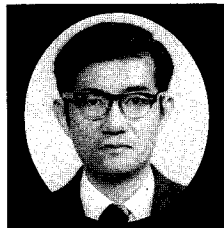
**沼野** 私が行っている大学には10名弱の活発会員がいますが、教員の中に教会員がいるということだけで、学生や宣教師の伝道を援護することになっているようです。LDS学生協会の顧問、インスティテュートの教師をしています。ほかにESSの顧問もしています。宣教師を紹介したり、学生に教会の英会話を勧めたりしています。時々学生を家に招いてみたいと思っていますが、多数の学生の手前、誰をどのように招けばよいか思案中というところなんです。いずれにしても大学では自由の幅が大きいように感じられますね。

**南本** うらやましいですね。私も生徒を教会の英会話に誘うことで伝道できると思うんですが、住んでいる所と勤め先が1時間半程離れているのでフォローが大変なんです。

**牧瀬** そうですか、私の場合も職場と住



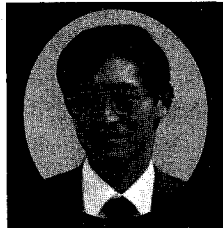
鮫島邦彦 (札幌)



沼野治郎 (広島)



牧瀬十二郎 (大阪北)



松重光治 (広島)

んでいるところが遠くて、教会の行事に招待するのがちょっと難しいんです。職住の接近をはかって、常に生徒を家に呼んでフェロシップする方法もあるのですが、これも意図的にやると、同僚の反感を買う恐れもありますね。

**高良** ちょっと宣伝くさくなるかも知れませんが、私の学院では6名の教師がモルモンなんです。親御さんから子供の対人関係のことで相談された時などは、教会を紹介するようにしています。

**矢野** 私は教会の責任を印刷した名刺を作って置き、向こうから求められた時は、「私的な物で失礼ですが」と言って差し出すようにしています。すると必ず質問してきますね。教会のことを。私がモルモンであることはクラスの父兄やPTAの役員さんも知っています。家庭訪問その他で必ず教会のことを父兄から尋ねられるので、説明という形で、伝道の機会を作ることができます。

**安田** PTAと言えば、私のステーキ部内にはPTAの会長さんをしている会員がいますよ。私自身もボーイスカウトの団委員長や自閉症児の父母の会の役員などをしていますが、教会員はもっと社会の中にとどんで入っていくべきだと思いますね。

**湯沼** そうですね。世間に出て行かなければ伝道はできませんよ。

**寛** 私は養護学校で進行性筋ジストロフィー症児を対象にしていますが、彼らの寿命は20年から25年位なんです。現に私のところでも卒業生を含めて年に数人亡くなっていきます。彼らと死生観や人生観について語り合う機会があればと考えています。

**南本** 少し抽象的な言い方になるかもしれませんが、私たちは教育者として、人格の完成を目指すように生徒に教えることができるので、その点をいつも念頭においていれば、完成された人としての神に到達するための道を示すことができると考えています。具体的には、生徒に人格完成の目標をあげさせ、それを追求するようにチャレンジするというのですが、これによって伝道的一端を担うことができると思います。

**阿部** 私は伝道について考える時、太陽のように距離をおいて伝える輻射型、そばにいただけで足元から暖まる対流型、握手し、常に接触して伝える伝導型の3つに分けられるような気がします。教師はどちらかといえば輻射型、対流型で光と熱を発しているのではないのでしょうか。それに感じる生徒はひとりりで集まってきます。他のきっかけでも、いずれは何か機会があれば、

福音に導かれるでしょうね。

**牧瀬** ただ、やはり生徒にはセミナーなどの直接に福音を教える場がないと改宗は難しいですね。親の了解なしに宗教教育をすると、トラブルを引き起こすことも考えられますね。

## 《末日聖徒と教職》

——教職を目指す若い末日聖徒も数多くいると思いますが、末日聖徒の生きる道として教職は向いているでしょうか。あるいは、教職と教会員としての生活の両立は可能でしょうか。

**松重** 教職は会員として良い仕事だと感じています。福音や霊的な事柄に関心を持つ生徒を見つけた時は特に強く感じます。模範によって生徒を導く教師は、会員にとって生きがいのある仕事だと思いますよ。両立も可能です。

**沼野** 人を教え導くことは教会員の生活の一部ですし、真理の探求、諸分野における研究は福音が指し示す方向です。個々の適性という問題もありますが、向いているのではと思います。両立はできますね。

**矢野** そうですね、教職は人の人格形成に直接かかわる仕事ですし、教会生活で目指している生き方や、信仰生活を通して得たものを生かすことができる部分を多く持っているという点では向いていると思います。現実的には難しい問題もいろいろありますが、今まで何とか両立させてきましたし、これからも頑張りたいと思っています。

**南本** 愛を実践する上でも、とても良いと思いますね。安息日も比較的守りやすいですし。

**阿部** 正しい教育論と方法を持っている



のですから、もちろん向いています。教職と信仰の両立も可能です。私たちはもっともっと積極的に教育の分野で働き、提言もしていくべきだと思います。

**筧** 教職だからということとは特別ありませんが、サラリーマン生活をした時や他の経験から自分なりに考えてみて、時間的余裕が多少なりともある、経済的にはそう恵まれなくても安定している、宗教においても学校においても教育の重要性が高いという共通点があるなどの良い点が挙げられると思います。両立は十分可能ですが、現実の様々な問題に対して、いかに福音を実践し、効果を上げるようにするかという点になると、そう簡単ではありませんね。

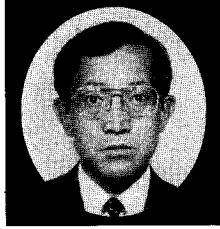
**鮫島** 私も教職に就く前は、一般の会社に勤務していましたが、どちらが良いとは判断できません。両方とも楽しいですし、教会生活に悪影響を及ぼすものは、両方共になかったと思います。

**潟沼** 先ほど適性という言葉も出てきましたが、個人的な資質という問題もありますから、一概に末日聖徒は教育者として向いているかどうかということを論じるのは無理のような気がします。両立ということについても、もともと教会生活の中に社会生活が含まれているのであり、両者を分けて考えるということは、私の頭の中にはありませんね。

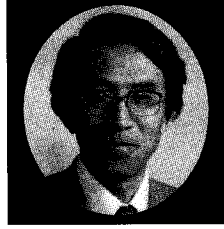
**高良** モルモンは教育者に一番向いていると思います。両立については、宗教は生



水田 正 (広島)



南本邦雄 (堺)



安田琢三 (札幌)



矢野信保 (福岡)

活に溶け込んだ一部であり、教育者に限らず、社会生活で両立できなければ本当の信仰生活とは言えないと思います。でなければ、山奥にこもるしかありません。

## 《今日の教育環境》

——犯罪の低年齢化、校内暴力、家庭内暴力、また入試競争の激化、知育偏重といった言葉が新聞やテレビなどをにぎわしていますが、皆さんは教育の第一線におられて、それをどのように感じ受け止めておられるでしょうか。

**南本** 確かにそういう問題が見られますね。特に重大なのは社会全体がそうした退廃的傾向にあるという点だと思いますね。

**矢野** 私の勤める学校も今まで非行や校内暴力のほとんどなかった学校で、有名高校への進学率が高いことで知られていましたが、社会の風潮の影響が、ここ1、2年少しずつ生徒の態度に表われてきているのを感じます。

**安田** 私のところは職業高で入試関係の問題は少ないですが、やはり社会全般の悪い影響下にあることは免れないですね。こういう環境の中で、生徒に正しい道を示していくというのは決して生易しいことではありませんね。

**寛** 私のところでも以前、そういう問題があり、子供との触れ合い、教師間の意志統一を図ろうとしたのですが、自分の非力さを感じるばかりで、子供の指導と福音の実践をどう効果的に調整していったらよいか悩んだことがあります。

**水田** 現在、様々な社会問題がありますが、それらの根源は、純潔の律法、つまり恋愛観、結婚観、家庭観に関する価値観が完全に混乱していることにあると私は見えます。私たち末日聖徒はこれらの点について完全な基準と真理を教えられているのですから、行ないや言葉を通して教えることができますと思います。

**南本** そうですね。教師間でも純潔の律法を大切なものと考えたり、厳しく守る人が少ないです。私たちは教師たちに対してもよい影響を及ぼすべき立場にありますね。

**水田** 非行や犯罪の道に迷い込む青少年が増加していますが、彼らは愛、結婚、家庭、育児などについて一番知りたい時にその機会を与えられていないんです。その結果なんですね。私はこれからは立派な両親をつくるこそ教育の最終目標になると思っています。

**阿部** 末日の様相という感がありますが、その陰にあるのはサタンがその支配を強化

してきているということだと思います。私は自分の課題はそれに誘われて埋没している霊の義人たちを見つけたし、守り、育てて、自己の使命を思い出させることだと思っています。

**牧瀬** 私は定時制高校で教えていますが、生徒のほとんどは学力的に全日制に進学できない子で、家庭的にも生活苦や諸々の問題を抱えているケースがかなりあり、基本的な生活習慣ができていない生徒も多くいます。彼らの中にあるコンプレックスを取り除き、前進していく勇気を与えたいと思って全力を尽くしているつもりですが、これらの生徒に全寮制の高校で福音の光の当たる場があったらどんなによいかと思います。選手になる程の技量に恵まれた者だけが優遇され、落ちこぼれていく者を正しく救い上げる場が少ないと思います。

**高良** 私は受験体制一本やりの現在、教育のあり方に疑問を感じ、そういった子供たちの可能性を引き出したいと考え、3年前に今の学院を開校したのですが、愛のある個性教育が、物を作る喜びや先生とのつながり、仲間とのつき合いの楽しさを経て実り、徐々にですが勉強への意欲も持つようになってきていますね。

**南本** 愛のある個性教育というのは本当ですね。私もキリストのような愛を示すことができると努力しています。生徒をありのまま受け入れることができるようになるというのが私の課題です。

**水田** 現在の小学校教育でも児童たちは個性を伸ばす時間を奪われていますね。学校ぎらい、勉強ぎらいが増えてくると思います。興味をもって楽しく学習でき、しかも能力に応じて個人学習ができるようにす

る必要がありますね。私の場合はなるべく宿題を少なくして、子供たちが友人や家族と過ごしたり、スポーツや自然に親しむ時間を十分持てるようにしています。できるだけ生徒との個人的な触れ合いを持てるように、一緒に遊ぶことも大切だと思っています。

**鮫島** 大学でも学生たちの中に無気力、無目的なところが見られるようになってきています。それでも、3年目あたりから教室に来て教師と個人的に知り合ってくると、この問題もかなり解決できるように思えます。卒業する頃には随分変わっているのを感じます。やはり教育の基礎は人格の移入であるような気がしますね。

**沼野** 私の勤める大学は純朴な学生が多いと思いますが、やはり学習意欲の不足、マズプロ化した授業への対処が課題ですね。学生たちに勉学の意欲を持たせることに全力を尽くしてます。

**寛** 私の場合は、他の人と比べて短い生徒たちの人生を生き生きとしたものにしてやれるようにするにはどうしたらよいかという点を課題にしています。子供たちと心を開いて何でも話し合えるようにし、そこから勇気づけ、良い影響を与えてやれるようにしたいですね。

**矢野** 今年の私のクラスには、両親のいない子、父ひとり子ひとりでしかもその父が盲目という子、母ひとり子ひとりで小学校では登校拒否と非行を繰り返してきた女の子などがいて、特に心を配っています。厳しさと優しさをもって、この子供たちの心を理解できるようになりたいと願っています。また学校教育の場では福音を教えることはできないわけですが、生徒の心に迫ることができるのは道徳の時間が一番である



と考へ、道徳主任を引き受け、校内でその実施に頑張っています。

**阿部** 私は職場にあって、一教師として、人間と人生の何たるか、いかにして平和を作り出し、何とどう戦っていったらよいかを、身をもって示し得る者になりたいというのが望みです。

**鮫島** できるだけ多くの若者に豊かな感性を身につけていって欲しいですね。

**高良** 鮫島兄弟は先ほど人格の移入と言われましたが、その通りですね。私も教育というのは教師の人格の投影だと信じています。

**湯沼** ちょっと辛らつな言い方かもしれませんが、大学でも幼稚な学生が増えていますね。それでも、よい面もたくさん持っているんです。そのよいところを伸ばすことが大切です。

**南本** 私が自分の課題にしているのは、日々福音に生き、自分を清めていくことです。霊的に自分の状態がよい時は、生徒にもよく愛をもって接することができます。

## 《今後の課題・希望》

—皆さんそれぞれに様々な悩み、希望といったものがあるかと思いますが、最後にそれをお聞かせ下さい。

**南本** 中学生を教育する上で多くの問題もありますが、教師をしていてよかったと思っています。同時に自分の力の不足や愛の不足を今感じています。

**寛** 教師という職業はとても素晴らしいと思います。ただ全身からあふれてくる感じといったものはまだまだこれからです。とにかくこれから頑張っていきたいと思います。

**矢野** 全国にはかなりの末日聖徒の教職

者がいらっしやることと思いますが、親睦と研修のための LDS 教職者の会とでもいったものがあれば、どんなにか励ましになると思います。是非実現したいですね。

**鮫島** そうですね、教職についている会員はたくさんいるはずで。私も今後お互いに手を取りあって良い影響を与え合うことができたらと願っています。この機会がそのような糸口になれば素晴らしいですね。

**牧瀬** 今は教会の責任と学校の責任の間を走りまわっていますが、私の時代はこれでいいと思っています。今は土壌造り、種まきと心得ています。夢でしかありませんが、私の望みは自分の子供や孫が、教会と社会とか区別せずに、学んだこと、練習したこと、経験したことがそのまま即社会人として利用できるようにしてやることです。そのためには、モルモンが活躍している社会も必要だし、モルモンの教義が正しく教えられる場(学校)も必要だと思います。

**高良** 私の課題は、理想の高校造りです。ここ2年以内にアルマ高等学校を造りたいと望んでいます。

**阿部** 大学の規則と宣教師制度との隘路<sup>かいろ</sup>を解決することが、われわれ教育者の現実的課題です。末日聖徒の教育理念、つまりキリストの真の福音を、実現する学校、特に高校・大学の設立を期待し、夢見ています。会員の子弟のニーズを満たすために、スポーツ、文化各面で専門的に高め得る教育機関、組織が必要です。日本の社会では経営的にも可能ではないかと思っています。広大なアジア大陸への伝道の拠点として、真にアジアの友となる教育機関、理想的には大学を早急に作りたいですね。

(アンケートを基に編集・構成しました)

## 札幌にソルトレーク 神殿を建てる！

### —札幌大通り支部—

**私** たち札幌西ステーキ部の会員は、34回目を迎える「さっぽろ雪まつり」の雪像作りに今年初めて参加しました。

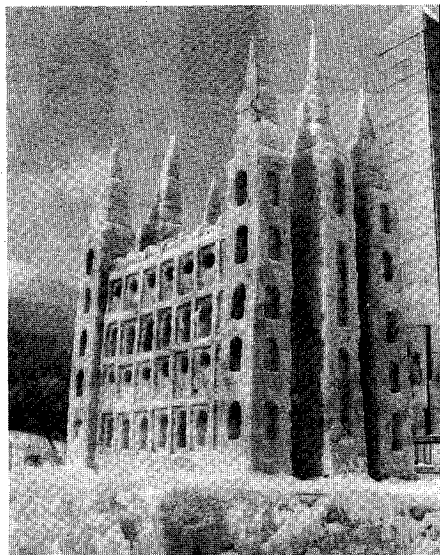
市民が手がけることのできる小雪像は全部で92基ですが、その3倍にも及ぶ競争率にもかかわらず、最も人通りが多く地理的条件の良い大通り西5丁目の一角に雪像を作る権利を得ました。何を製作するかいろいろ思案した挙句、ソルトレーク神殿を作ることに決め、設計図を書き、粘土で模型を作ることから始めました。5日間の製作期間中、毎日夕方から多くの教会員が駆け付け、いろいろな形で雪像作りに参加しました。

今年は例年に比べ、積雪量が少なく、し

かも暖冬で雪質が悪いため、角張った所の多い神殿を作るのはとても大変でした。あまり表面が汚いので、車で教会の裏庭からきれいな雪を運んで作業をしたこともあります。国際的になったこの祭りで大勢の人たちにこの神殿を見てもらえると思うと、冷たい水の中に浸した雪を雪像に張り付ける作業も少しも苦になりませんでした。

「これはロンドンのビッグベンだ」と通りすがりの人に言われて、苦笑いしたこともあります。が、「これはきれいだ」「芸術だね」と言ってくれる人も結構いて苦勞が報われたと思いました。神殿の雪像の前で記念写真を撮っていった人々もいます。いつの日にか彼らの家に宣教師が訪問し、その写真の雪像がこの教会の神殿であることを知ったらどんなに素晴らしいことでしょう。

最後に塔の頂上にモロナイ像を置いた時、私たちは、モロナイがそのラッパを高らかに鳴らす日を今や遅しと待ちもうけているかのように思いました。(レポーター：札幌西ステーキ部大通り支部幹部書記・栗原謙)



▲「さっぽろ雪まつり」の雪像作りに参加した札幌大通り支部の会員たち  
◀完成した「ソルトレーク神殿」の雪像

## 関東地区学生協会主催 学生セミナー開かる —人間の基本を考える—

2 月19日(土)に、関東地区学生協会主催による学生セミナーが「人間の基本を考える」をテーマに東京ステークセンターで開催されました。

今回のセミナーは、末日聖徒の学生が自分の役割や目標をはっきりと把握することを目的とし、外部から時事通信社内外情勢調査会編集部長の小関哲也氏、三村言語心理研究所所長の三村侑弘氏、金融教育センター取締役社長の若泉典世氏、また田中地区代表をはじめ関東地区の各ステーク部長を講師として招きました。遠く京都の地から来てくれた兄弟姉妹を含めて約100名の参加の下講演が開始されました。

午前中は、田中地区代表、学生協会事務

局長の佐藤正温兄弟、前仙台伝道部長の坂井圭兄弟から末日聖徒としてまた人生の経験豊かな先輩としてのお話を伺い、午後は三村侑弘氏、若泉典世氏、新山東京ステーク部長、福田東京北ステーク部長、前田東京南ステーク部長を講師とする各クラスに分かれ、「説得の心理学」「美しいマナーは日本人の心」「人生設計と学生生活」「社会に奉仕できる人間になるには」「仕事と学生生活」というテーマでセミナーが行なわれました。

最後の特別講演では「混迷を深める世界は今……」というテーマで、中近東や米国などの特派員として豊富な経験を持つ小関哲也氏から世界の政治、経済、軍事情勢などについて興味あるお話を伺いました。質疑応答の時間には積極的に質問が出るなど、長時間にわたる講演にもかかわらず、皆しばし時間を忘れ、あふれる熱気の中にセミナーを終了しました。(レポーター：関東地区学生協会学生セミナー実行委員・平田寛)



(写真左)時事通信社内外情勢調査会編集部長・小関哲也氏による講演。(中央)三村言語心理研究所所長・三村侑弘氏による講習。(右)金融教育センター取締役社長・若泉典世氏による講習。

# 管理人として思うこと

## —教会堂と教会員の責任—

横浜ステーク部横浜第2ワード部  
管理人

斉藤 勉

**昭**和12年生まれ、現在46歳の私が仙台支部でバプテスマを受けたのは、昭和25年4月25日、13歳の時でした。それより1年前、友達数人と道路で遊んでいた時、通りかかったふたりの姉妹宣教師に声をかけられたのがきっかけでした。たどたどしくも優しく話し掛けられた私たちは有頂点になり、次の日曜日、申し合わせて全員で教会へ行きました。教会とは言っても仮の集会所の洋裁学校でした。

その後数年たち、現在仙台ワード部のある所に、古い建物を購入し、そこで集会をするようになりました。古くても自分たちの教会堂だという喜びは大きなもので、小さい時から物を作るのが好きだった私は、学校が終わるとほとんど毎日そこに通い、修繕をしたり掃除をしたりしました。それが私にできる信仰の表現のように思えて、毎日がいきいきとしていたような気がします。

高校卒業後、東京に出てきて3年程たった時、横浜支部に移りました。横浜支部は当時すでに土地と大きな建物を集会所として所有していましたが、後に新しく建物を作ることになりました。そして1964年、私が30歳の時、新しい建物の<sup>（1）</sup>鉄入れ式が行なわれたのです。当時横浜支部の活発会員は60人程で、建築資金がそうあるわけでもありませんでした。教会本部が出してくれるお金に対して、会員が労働奉仕をしてその

返済に当てるということで、建築宣教師を中心に、会員が一人丸となって働きました。

地下室のための穴掘り、外郭ができた屋上に登り、寒空の下、防寒具に身を包んで夜の町の明かりを見ながらの鉄筋組みなど思い出は数々ありますが、現在管理本部の建築部で働く岡本兄弟が夜の労働奉仕中に転落して大けがをした時のことは今でも私たちの語り草になっています。十数人いた建築宣教師の食事の仕度は姉妹たちが中心になり、また子供や兄弟たちも早朝、あるいは夜からと手伝いをしました。教会堂ができるまでの間集会所はなく、私たちは幼稚園、中小企業会館などを借りて、あちらこちらを渡り歩きました。

1966年、ヒュー・B・ブラウン長老管理の下に行なわれた献堂式の時、私はコーラスの指揮者になりましたが、コーラスが始まると、会場のあちらこちらから感動のすすり泣きが聞こえ、喜びで胸が躍るようでした。当時いたある宣教師は、不活発になりそうになったら、この建物を見に来ますと言って故国へ帰って行きましたが、私たちの信仰にとっても、この建物はある意味で大きな支えの役割を果たしてきてくれたのです。

あれから16年、形ある物は消滅すると言いますが、この建物も大分くたびれてきました。汚れ、傷んだ建物を見る度に、多くの人々の貴い献金、建築宣教師や会員たちの苦労や奉仕の結晶に傷を付けられたよう

な何とも言えぬ悲しい思いをしていた私に、ステーキ部長のすすめがあり、管理人の仕事を引き受けることになりました。

初めの頃は、学生時代に戻ったような気持ちで毎日、時も忘れるように、玄関のタイルの張り替え、窓の取手の付け替え、ボルトの取り替えなどと傷んだ所を直し、少しでも新築当時の姿に復元しようと頑張りました。しかし失なわれていくのを最小限に抑えることはできても、失なわれてしまった物はどうすることもできません。それに、私ひとりがいかに頑張ったとしても、百数十人の人が出入りし、様々な活動をするのですから、それに追いつくことなど考えてみれば、とても無理な相談なのです。残念なのは公共物を大切に、汚したらきれいにし、使ったらその後片付けをしておくというような人間として極めて初歩的な責任がおろそかにされているのを目にする時です。

私は小さい時からこの「責任」ということについて人一倍厳しくつけられてきましたが、一般の人より道徳観念が強いはずの教会員に対して、このことで悲しい思いをせざるを得ないというのは残念です。

先日このようなことがありました。日曜日の集会が終わった後で、ひとりの兄弟が裏庭に椅子を持ち出して聖書を読んでいるのです。美しい光景だと思いました。ところが彼はそれを元あった所へ置くのを忘れ、雨に降られた椅子は、メッキの部分が赤くさびてしまったのです。聖書を読むことはクリスチャンとして素晴らしいことです。しかし神様は聖書の中で責任を持つことの大切さも教えておられます。皆が帰った後、少人数でテーブルや椅子の後片付けをした

り、台所、トイレをきれいにしたりしている人もいます。ひとりで礼拝堂の讃美歌を整理したり、庭の草むしりをしている人もいます。夏の暑い日、汗をかきながら冷たいアイスクリームを届けてくれる心優しい姉妹もいるのです。人として、クリスチャンとしてこのような生活習慣を大切にし、身につけなければならないと思います。ましてや先人の犠牲と奉仕によって建てられ、断食の家、祈りの家となった教会の建物においてはなおさらのことと思います。

今、集会所は100パーセント会員が納めるワード部予算で維持されています。すべて大切なお金の中から支払われるのです。トイレのペーパータオル1枚でさえ大切にしなければなりません。キンボール大管長は美しく整理整頓された集会所こそがみたまを受けるにふさわしい所と言われました。この教えに従い、私たちの受けている恵み一つ一つに感謝し、集会所を憩いの家、断食の家、祈りの家にしようではありませんか。そうすることにより、神の大いなる祝福を与えられるにふさわしい者になることができますと信じます。(さいとう・つとむ 1937年生まれ)



▲齊藤御家族

## 従順を 学んで

福岡ステーキ部  
藤崎ワード部  
浜田 光



**我**が家では妻とふたりの娘は早くから改宗して教会員になっておりましたが、私だけは仕事にかまけてなかなか改宗しませんでした。ホームティーチャーの方や教会のお友達には雑談や食事などでよく接し、教会外の人たちとはどこか違う良い印象で、安心して話せる人たちだと思っておりました。私が急病で倒れた時などは救急車へ運んでいただいたり、病室で癒しの儀式をしていただきました。私は意識不明で知りませんでしたが、後で聞かされ、大変お世話になったのだなあ感謝し、その時のことが後まで非常に気にかかっておりました。

昭和55年5月1日の煙草の値上げの時のことでした。それまでも何度かあった値上げの時は大して気にもせず過ごしてまいりましたが、その時はやたらと腹が立ち、断固やめてやるぞと喫煙道具一切を処分しました。初めは誘惑にかられましたが、意地を通してやめることができました。酒は退院以後やめておりました。この時から何も知らずに知恵の言葉を守りつつあったわけです。今から考えますと、当時なぜその

ような気持ちになったのかまったく不思議です。まさにお導きがあったように思われます。

その頃たまたま東京の娘に用があり、電話をしました。用件はすぐに終わりましたが、その後長々と改宗するように口説かれ、教会に行くことを約束させられました。それから土曜日になって妻に「明日教会に行ってみない」と誘われ、前に娘との約束がありましたので行くのを承知しました。

日曜日に教会に行き、礼拝堂で待っておりました。その時親しみ深い様子で宣教師の方が寄って来られました。その方が池内長老でした。挨拶が済み、名前を告げますと、「それでは光恵姉妹としずの姉妹のお父様ではありませんか。私は彼女たちをよく知っています」という話から早速レッスンを受け始め、1週間の特訓でバプテスマを受けました。

最初は不安で一杯でしたが、池内長老の非常に和やかで親しみやすい雰囲気にも頼もしい感じを受けました。私はかたくなな人間でありましたので、皆がとても気を遣って下さり、心より感謝しております。このように順調に成長してきたのも、確かにお導きによるものと思っております。バプテスマ前の特訓の時に、すべて理解するためには従順にならなければいけないことを学び、従順になるよう努力致しました。

その後教会でレッスンを重ねている内に、従順であることは謙遜にもつながる大切な戒めであることが分かりました。私が今日あるのは従順になるよう努力したことが実りつつあるものと思っております。私がわずかでも成長することによって家庭内に明るさをもたらしたことを、妻や娘たちが

どんなに喜んでいただけると、今でも振り返ってみて、自分が従順になれてよかったと思います。

従順とは喜んで無条件に従うことと学びました。私たちは永遠の生命を得て昇栄するためには、神のすべての戒めを守ることが必要であると思います。時には戒めの与えられた理由が分からないことがあります。無条件に神に従うことにより、神に対する信仰と信頼を表わすと習いました。

主は私たちに従順で勤勉であるならば、知識と知恵を得ることができると言われました。また従順であれば霊的に成長することもできます。(エレミヤ7:23—24参照) 主は「もし汝わが誠命を守り終りまで忍ぶならば永遠の生命を得ん」と告げられました。(教義と聖約14:7) 正義と真理に従い、終わりまで従順である人々には多くの祝福が約束されています。私も従順であるよう努力して、さらに自己の改善をはかりたいと思います。(はまだ・ひかる 1915年生まれ、藤崎ワード部長老定員会第二副会長)

## 信仰と編物と喜び

福岡ステークス部藤崎ワード部

浜田王香

娘

ふたりが伝道を終えてそれぞれに結婚した時、これから先、何か自分のすることはないのかと考えました。そこで今まで好きでやっておりました編物に挑戦しよう決心しました。

五十の手習いで途中、何度も挫折もしま

したが、石の上にも三年とか申します、私は十年かかって講師、指導員、師範と進みました。今は学校で若い人の指導をしておりますが、初めは笑い涙の繰り返しでした。それでも楽しみもありました。毎月一回指導員の月例会があり、先生たちが多く集まります。それぞれにいろいろな話が出ますが、私は教会ではお茶とかコーヒーを飲まないという話や宣教師の伝道の話をよく致します。

ある月例会の時、宮崎から来られる先生が「きょうは浜田先生の喜び話をする」と言うので、皆で何の話かと待っていました。やがて先生は話されました。ある日この先生が「ごめん下さい」と言う声でドアを開けると、背の高い外人がふたり玄関に立っていました。普通ならびっくりしてドアを閉めるところが、その時なぜか私の顔が頭に浮かんできて、ひょっとしたらいつも話に聞いている宣教師とはこの人たちではないのかと思い、「何でしょうか」と尋ねたそうです。そうしますと思った通りモルモンの方たちだったのです。日本語の上手な面白い人たちで、楽しくお話を聞くことができ、この先生は続けて宣教師の訪問を受けていたそうです。その先生が汽車の中ではモルモン経は重たいと言っていたので、「聖徒の道」をプレゼントしたら、とても喜んで下さいました。その先生がバプテスマを受けられる日を私は今楽しみにしております。

ボランティアとして週に1回、夜学で働いている人に編物を教えていますが、藤崎ワードが新しい建物になることを話しますと、皆が私の知らない間に一円玉を集めてくれました。教会員であると言うだけで私の話



を信用してくれているいろいろな相談をうけることもあります。

今私はプライマリーの第一副会長をさせていただいておりますが、ホームメイキングで編物を教え、プライマリーの「明るい少女」のクラスでも編物と手芸を教えています。キンボール大管長は子供を育てるのと同じように、神から授かった様々な才能を広く人々のために活用するようと言われています。つたない才能をひとりでも多くの人たちに分かち与えることは私の大きな喜びです。

「しらがは栄えの冠である、正しく生きることによってそれが得られる。」(箴言16:31) これから先も私は美しく老いて、編物を通して神様の話を続けていこうと思えます。それともうひとつ、月に一回でも、御近所の人たちや、まだ教会に来たことのない



1982年10月に完成した藤崎フード部の教会堂

い人々に教会で編物を教え、教会に集う喜びの輪を広げていきたいと願っております。(はまだ・きみか 1921年生まれ、藤崎フード部プライマリー第一副会長)

## 編集室から

- ◎「各地のたより」「私の証」「職業と信仰シリーズ」などの原稿を募集しています。また今月号を読まれたの御意見・御感想をお寄せ下さい。「読者のひろば」で紹介しします。
- ◎6月号掲載分締切は4月20日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入して下さい。宛先:〒106東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室。

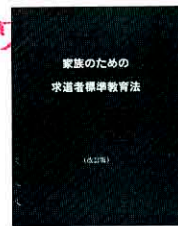
**訂正**

3月号33ページの写真説明で、「マービン・J・アシュトン」とあるのは「マービン・O・アシュトン」の誤りです。おわびして訂正します。

## 初等協会バッジ・ペンダント **新**

初等協会のバッジは、初等協会指導者または教師であればだれでも獲得できる。

- ネジ式のバッジ 800円
- ペンダント(鎖は自分で付ける) 650円



## 家族のための 指導者標準教育法 **新刊**

(58年度改訂版 レッスンプラン)

A4変型 70ページ 500円

昨年発売された改訂版にさらに改訂がなされ、濃緑色の表紙の装丁で発売中。

●今年度の「扶助協会教師用引き」p.76の引用文(ロバート・L・シン普森長老の言葉)が抜けいていますので、次の言葉を挿入して下さい。「ある立派な教師がある時こう言った。『読まない人は読めない人と何ら変わらない。』」(「聖徒の道」1976年2月号、p.38)



# 聖徒の道

1983年4月20日発行（毎月1回20日発行）第27巻第4号  
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

